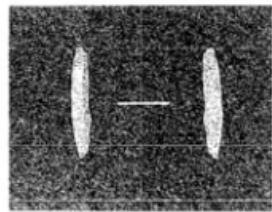
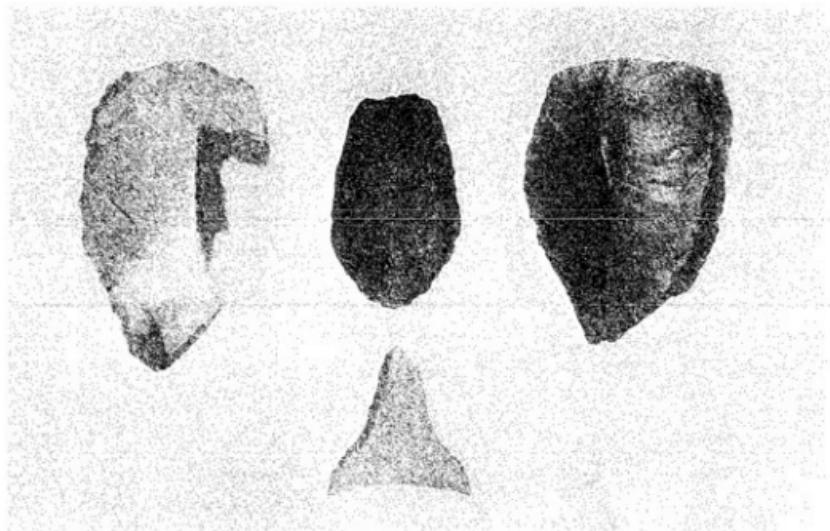
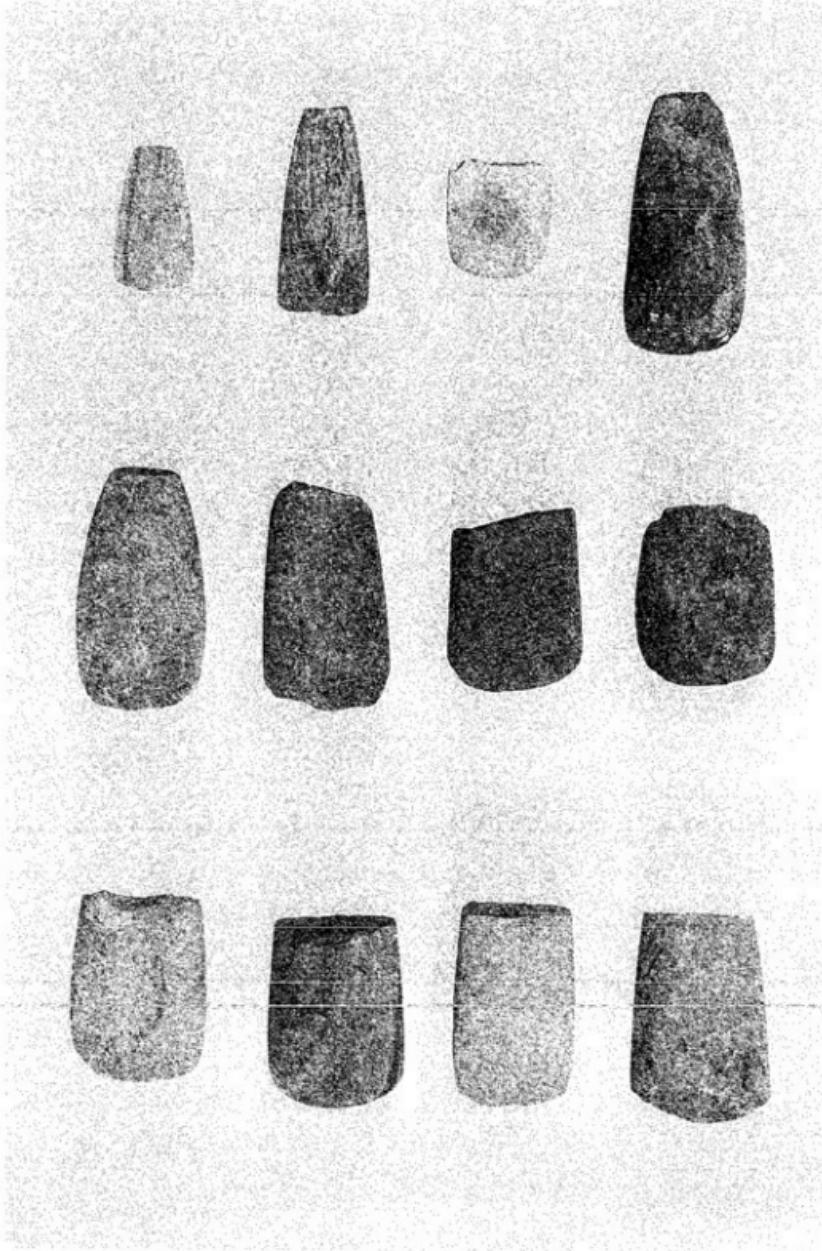


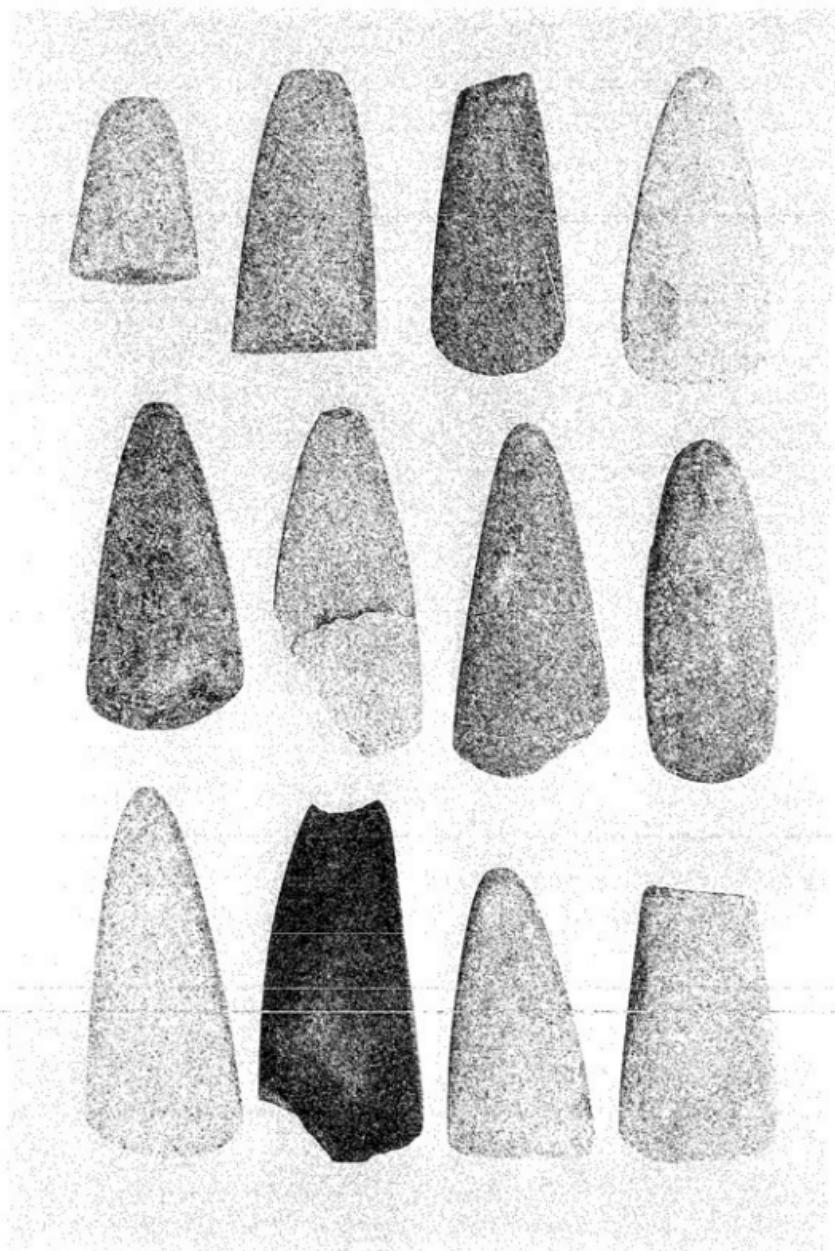
圖版57 遺構外出土石器



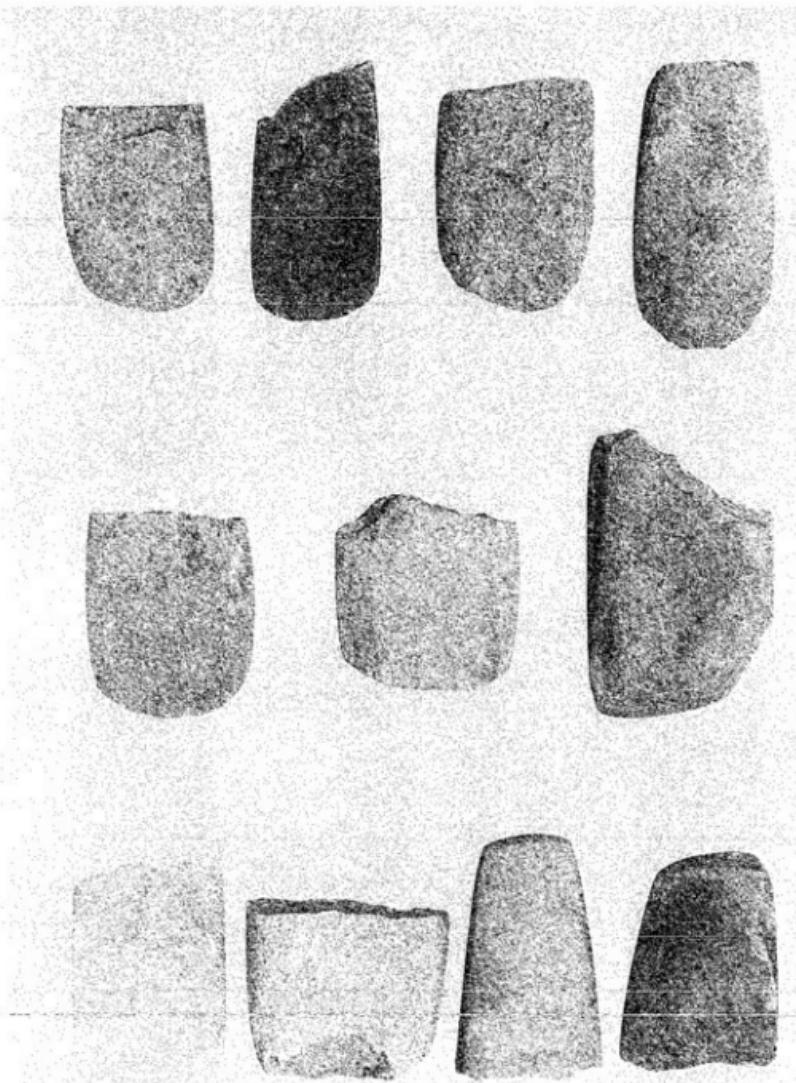
先土器時代の石器



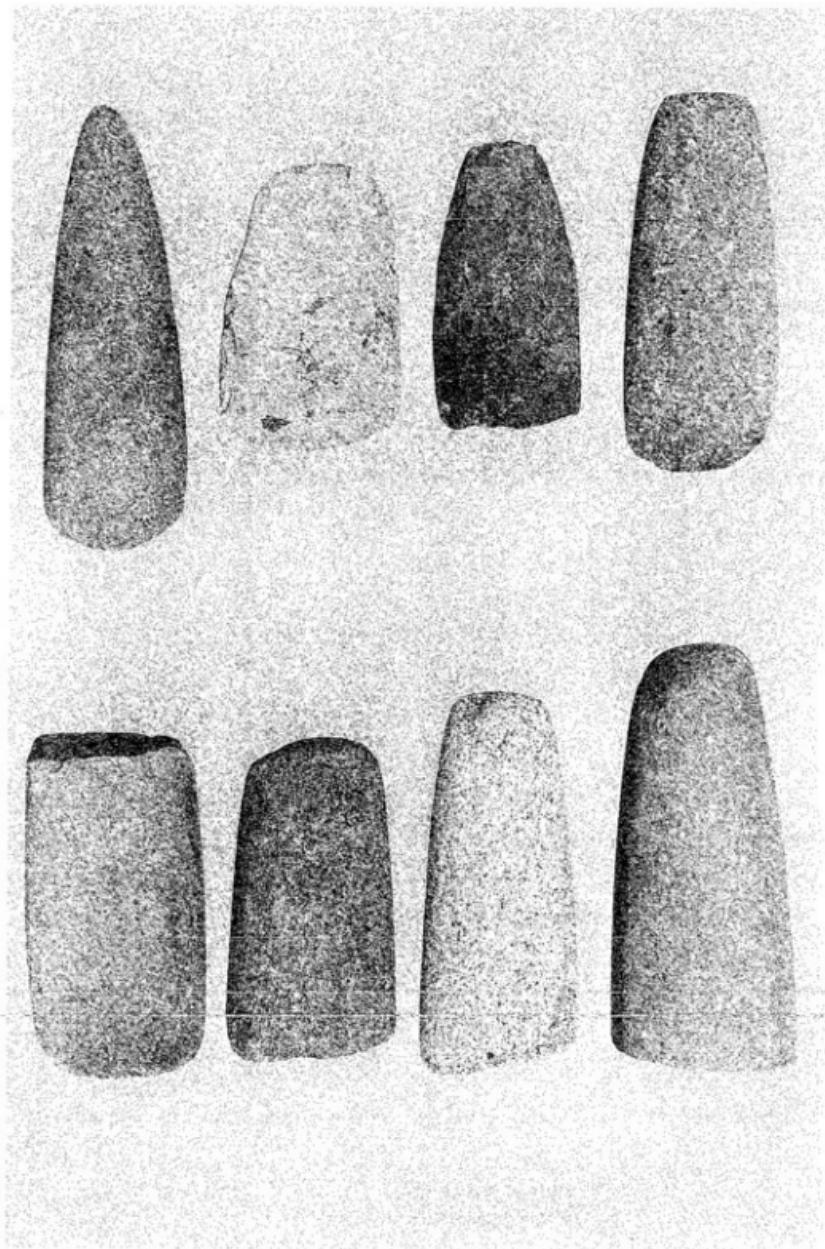
図版59 遺構外出土石器



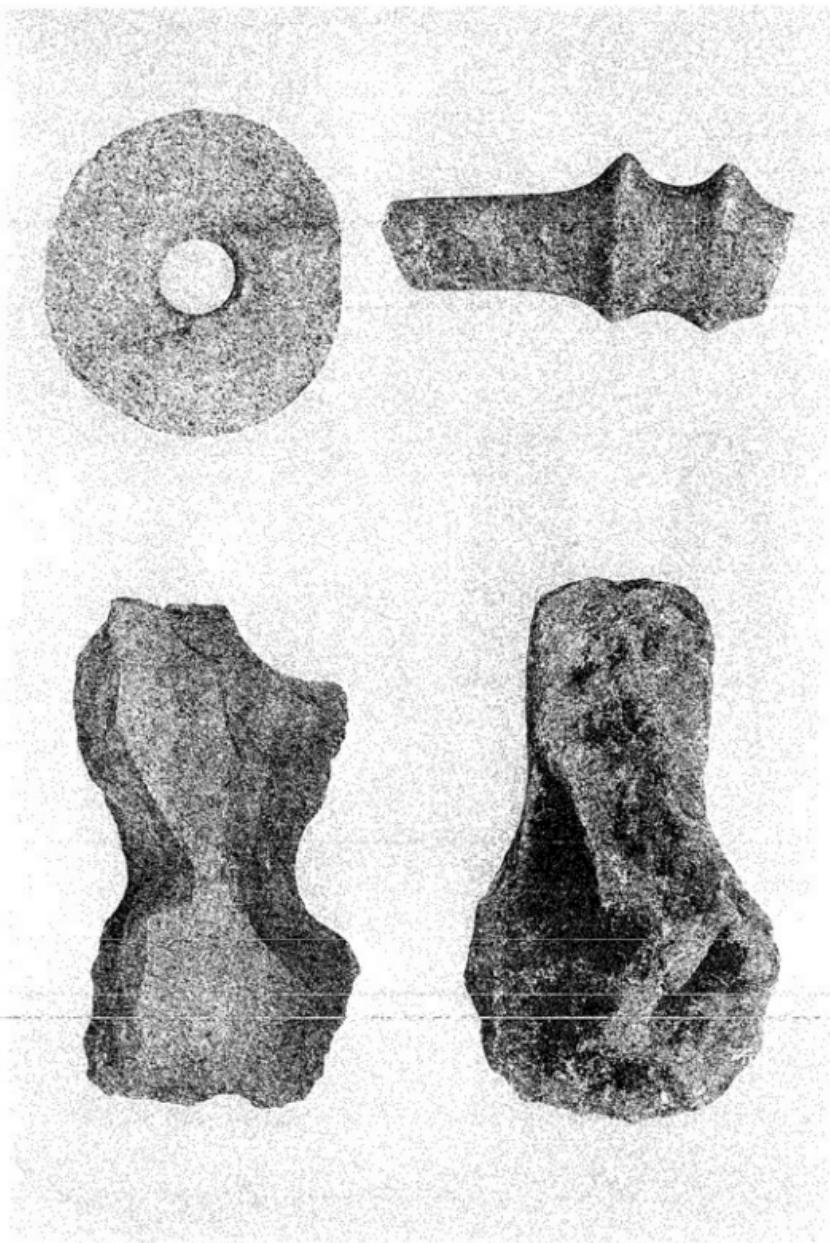
図版60 遺構外出土石器



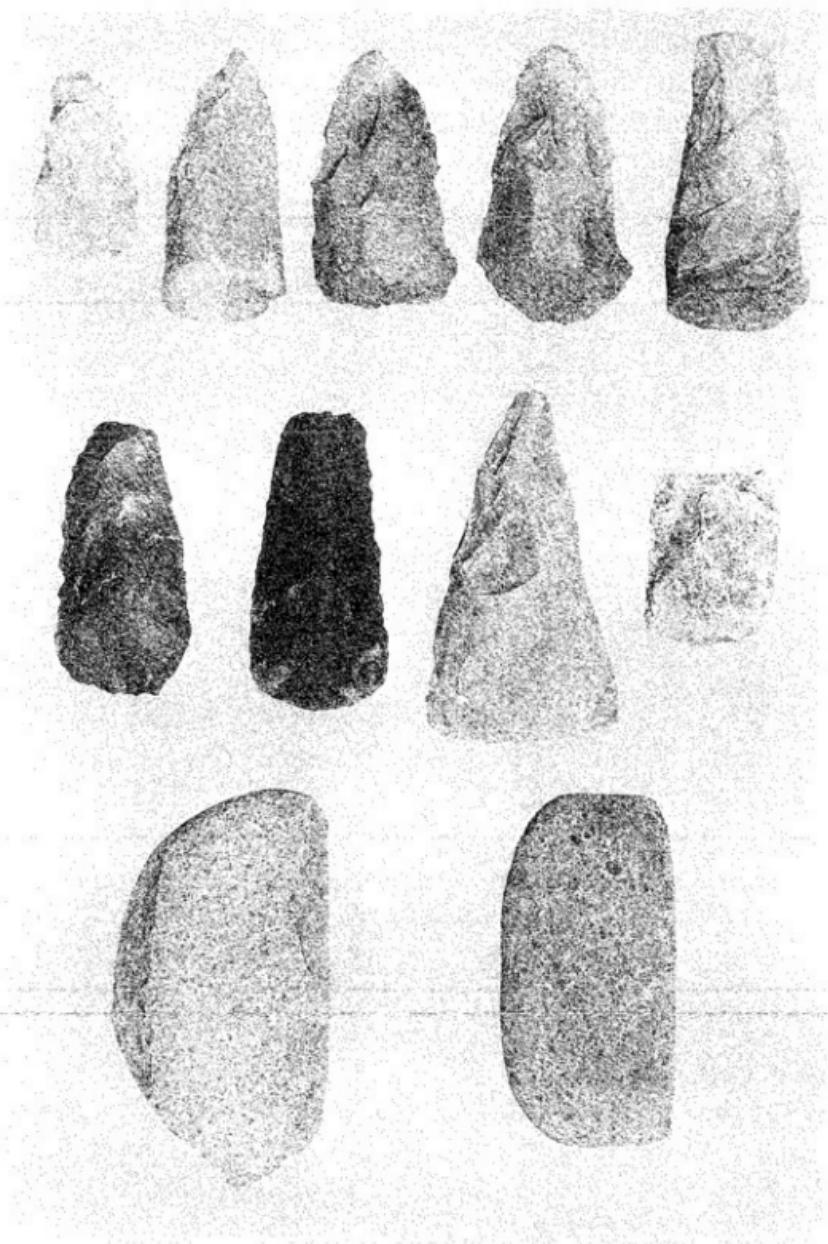
圖版61 造構外出土石器



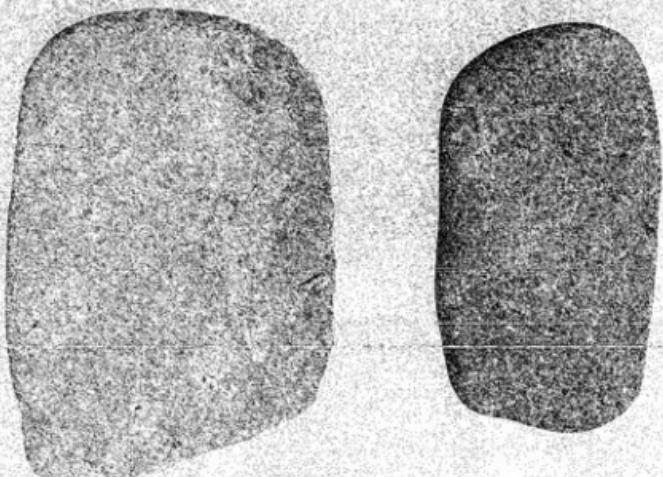
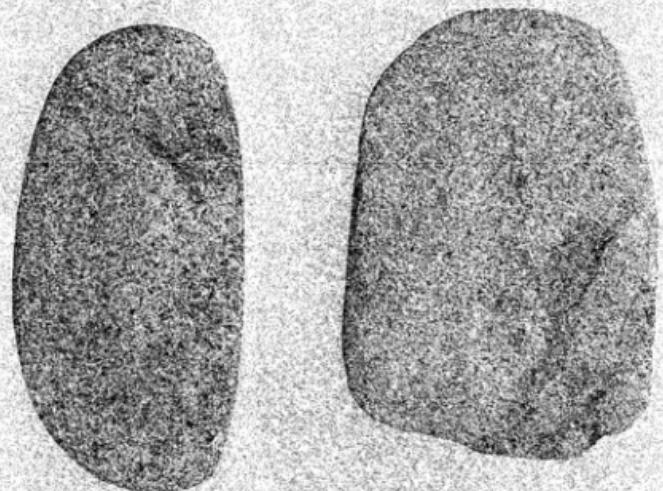
図版62 遺構外出土石器



図版63 造構外出土石器



図版64 造樹外出土石器



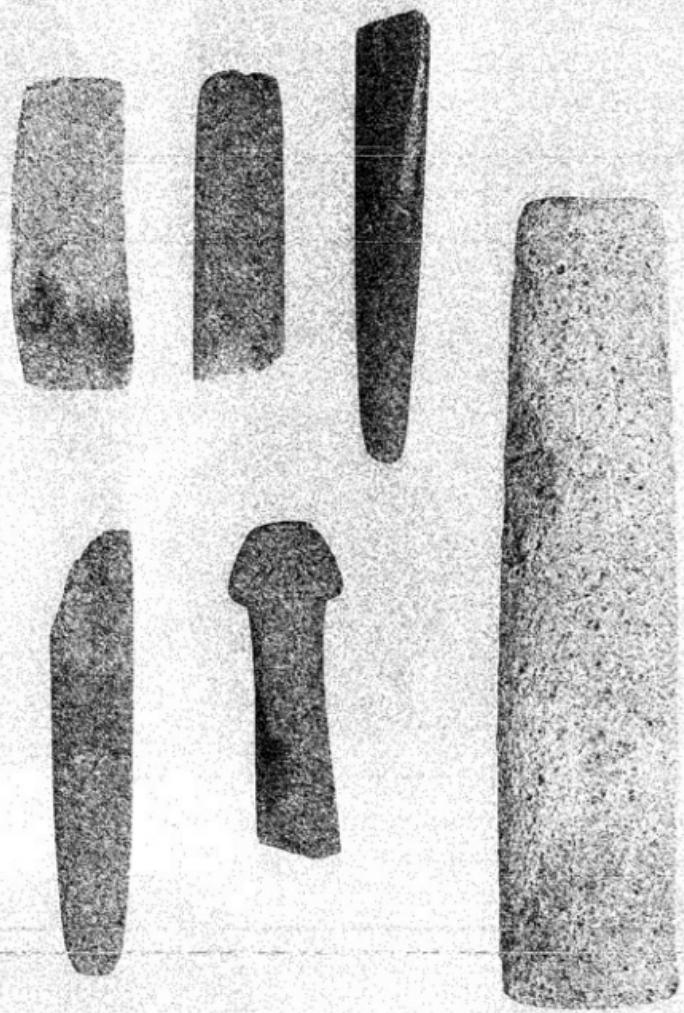
图版65 通横外出土石器



図版66 遺構外出土石器



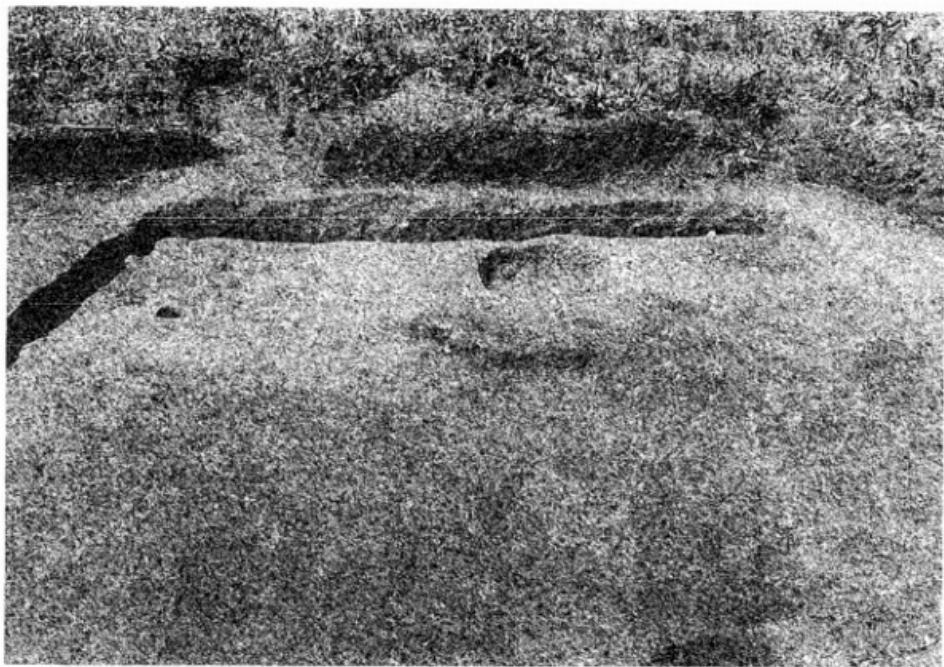
図版67 遺構外出土石器



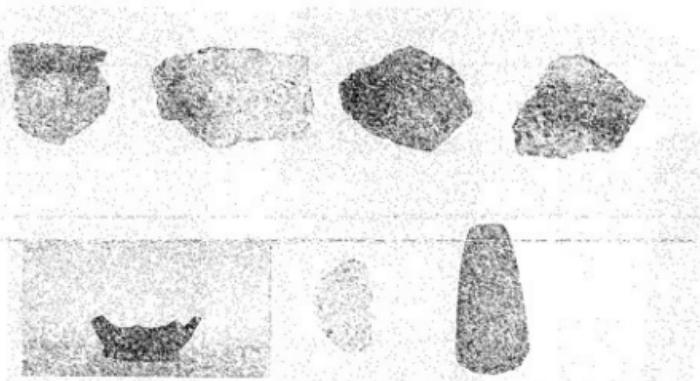
圖版68 進階外出土石器



図版69 石製品

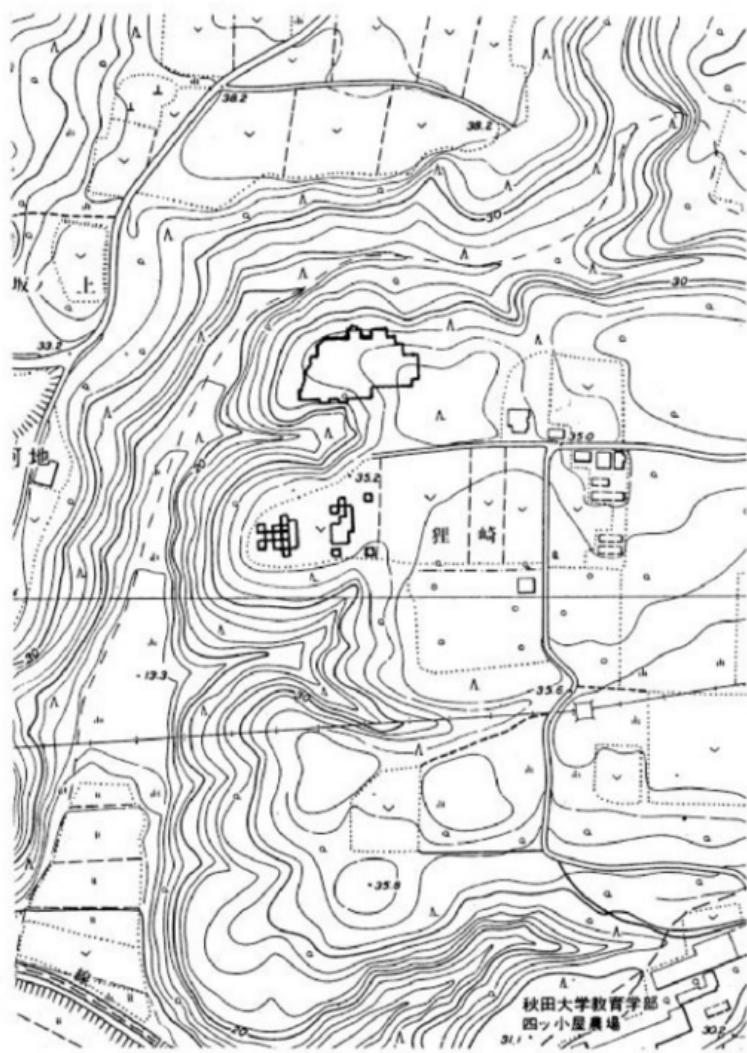


住居跡（南→）



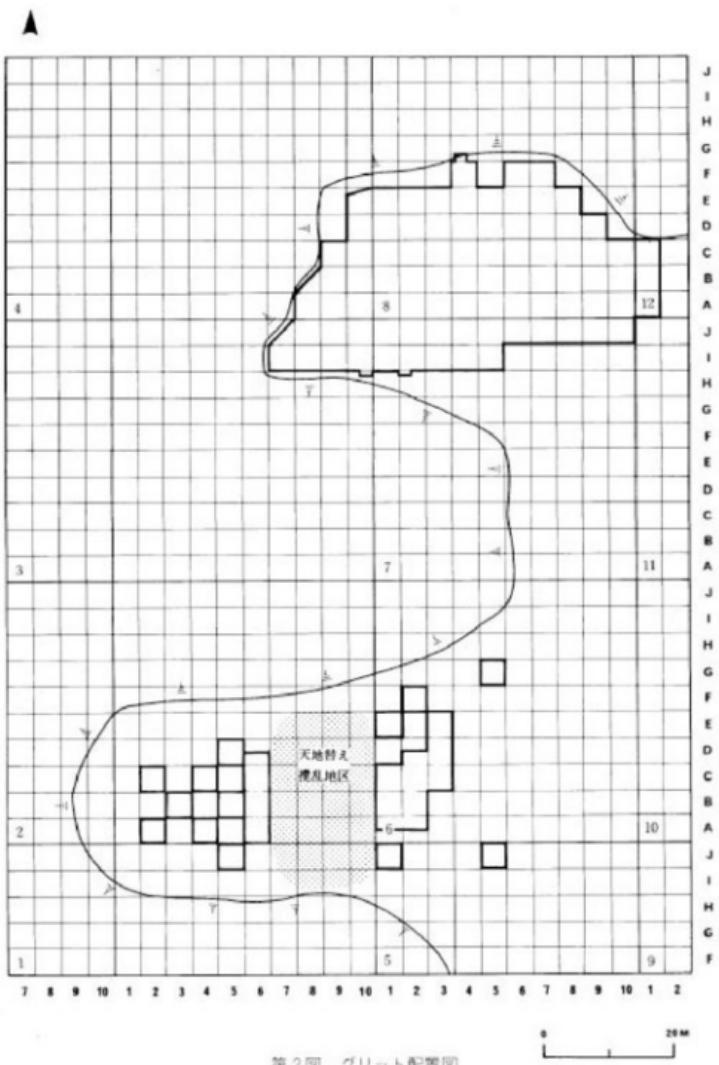
出土遺物

## 狸崎 A 遺跡



第1図 遺跡周辺の地形

0 100m



第2図 グリット配図

## 遺跡の概観

遺跡は西に向い舌状に張り出した台地上に位置し、標高約36.5mである。台地の東側を除く3方は比較的急な斜面となって沢地に落ち込む。台地はさらに西側に入り込んでいる沢によって2分されており、調査はこの沢をはさんで北側と南側の区域について行なった。その結果、遺跡は縄文時代前期、中期、晩期、弥生時代にかけてのもので、北側は主として縄文時代晩期、南側は縄文時代前期と弥生時代の遺構が検出された。遺構は竪穴住居跡7軒、土塁77基、溝跡3基である。

## 遺構と遺物

### 1号住居跡（第3図）

調査区南側のはば中央で検出された。

プランは長軸7.9m、短軸6.4mの橢円形を呈する。2号住居跡と重複し、北東壁が2号住居跡を切っている。確認面からの深さは18cmで、壁はゆるやかに立ち上がる。ピットは16個検出され、柱穴は壁部に隣接するものと遺構内中央部に集中しているものがあり、深さは中央部の2個を除きいずれも浅い。炉は地床部で、中央部に位置し、床面を円形に掘り込んでいる。床面は中央部に向ってゆるやかに傾斜する。北西の壁際から多量の剝片が出土した。

## 出土遺物

### 土器（第23図6～14）

全て覆土出土である。6～10は鉢形土器で、口縁部に沈線で網目状文を施す。網目状文は多段の平行沈線を主体に、沈線間、沈線下に構成される他、口唇部の山形状突起に向い頂部方向を一致させて施すものもある。10は内面にも同一の沈線を施す。11は鉢形土器で胴部上半に沈線でもって菱形文を描き、その後文様内部を磨消ししている。口縁部下端は磨消し無文帯とし、胴部との区画部分には刻み目を施す。12～14は捷形土器で口縁部と胴部との区画部分に3～5条の平行沈線を巡らす。口縁部には縄文の旭毛目文も施され、内面には横位の刺毛目調整がある。

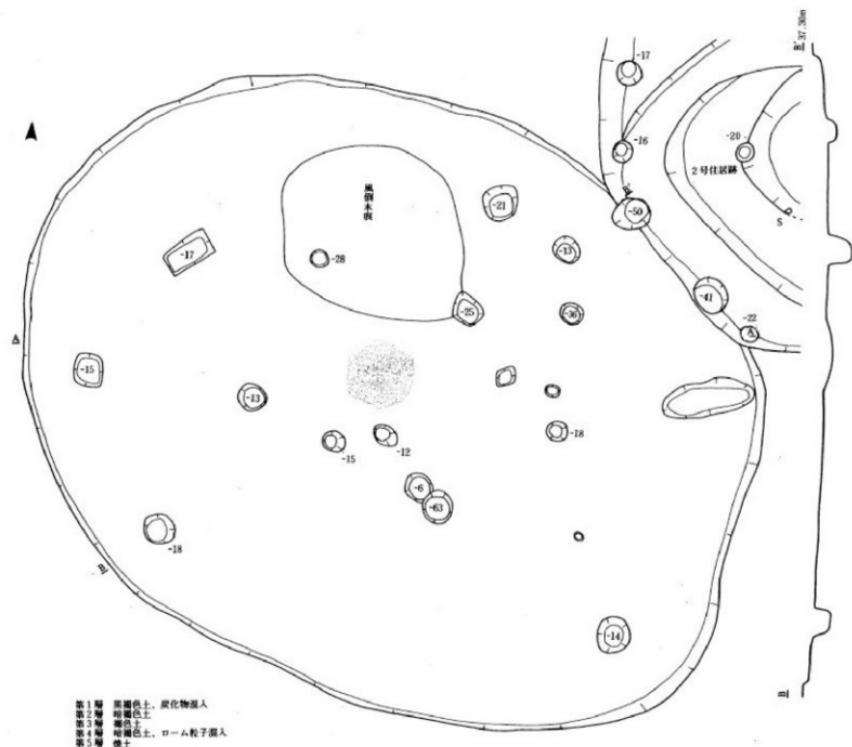
### 石器（第31図1～10）

1～3は有茎の石器で、2にはアスファルトが付着する。4は石錐、5～6は搔器、8・9は削器、10は小形磨製石斧である。

### 2号住居跡（第4図）

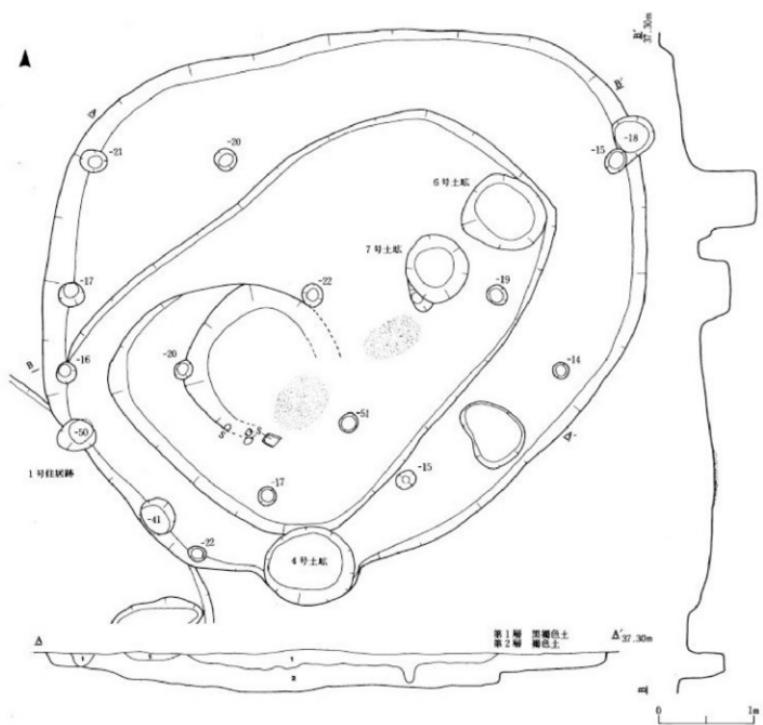
調査区南側のはば中央で検出された。

プランは長軸6.6m、短軸5.8mのはば橢円形を呈し、床面は2段構造で、内部で隅丸方形状に1段掘り込まれている。1号住居跡、4号土塁と重複し、それぞれによって南北壁、南壁が切られている。壁はいずれもほぼ垂直に立ち上がる。ピットは16個検出されているが柱穴についてははっきりしない。炉は地床部で南側に位置し、床面を約4cm皿状に掘り込んでいる。炉の北東側に焼土がみられた。床は全体的に平坦である。住居跡内北東側に6号、7号土塁が確認されたが、住居跡に伴うものかどうかわからない。



第3図 1号住居跡

0 1m



第4図 2号住居跡、6号土坛、7号土坛

## 出土遺物

### 土器 (第23図15・16)

覆土より出土した。いずれも深鉢形土器の胴部片で、器表面に木目状撚糸文を施す。

### 石器 (第31図11~14)

11は無茎の石鏃、12は石錐である。13はヘラ状石器で両面加工である。14は搔器で片面加工である。

### 3号住居跡 (第5図)

調査区西側の台地縁辺部で検出された。

プランは長軸4.8m、短軸3.3mの隅丸方形を呈する。壁は北側がやや緩やかに立ち上り、他はほぼ垂直。壁高は東側が高く25cm、他は13~20cm。床面は西側がやや凹凸を呈するが、他は平坦で、土塙により埋められているが、住居内中央部に焼土の痕跡がみられる。柱穴は長軸線に対称の位置で壁付近に設けられ、うち深い6個が主柱穴と考えられる。住居跡内に7基の土塙が重複している。いずれも土塙墓で、2基は中央部に、他は壁部につくられている。壁部のものは2基がその長軸方向を住居の壁方向に合わせ、他は住居跡中央部に向いている。いずれの土塙墓も本住居より新しい。

## 出土遺物

### 土器 (第23図17~22)

全て覆土出土である。いずれも鉢形土器で、17は工字文を、18・19は2~3条の平行沈線を施す。17は内面にも1条の沈線を巡らす。21は土器底部で、地文として比較的撚りの細かいL R単節斜罫文と底部には1条の沈線を巡らす。内面にベンガラが散布されている。

### 石器 (第31図15・16、第33図28)

15は削器で片面加工である。16は磨製石斧である。28はくぼみ石である。

### 4号住居跡 (第6図)

調査区西側の台地縁辺部で検出された。

プランは長軸4.3m、短軸3.8mの楕円形を呈する。壁は北側がゆるやかに傾斜して立ち上り、他はほぼ垂直。壁高は25~35cm。床面は北側が緩く傾斜し、土性は比較的軟質。他は平坦で硬くしまっている。が検出ではなく、48号土塙により消失したと考えられ、土塙東南隅に隣接した床面上に少量の焼土が見られた。柱穴は壁部に隣接して造構外周間に設けられる。住居跡内に7基の土塙が重複、いずれも土塙墓と考えられる。2基は造構内中央に、他は壁部につくられ、特に壁部のものは長軸方向を住居跡内中央に向けるものが多い。いずれの土塙墓も本住居より新しい。

## 出土遺物

### 土器 (第23図23・24)

全て覆土出土である。いずれも鉢形土器で、23は器表面に工字文、内面には1条の沈線が巡る。24は沈線によって区画された磨消罫文により入組状の文様を意匠する。

#### 石器（第31図17）

17は磨製石斧である。

#### 5号住居跡（第7図）

調査区の北西側で検出された。

プランは長軸3.2m、短軸2.1mの楕円形を呈す。壁はいずれもゆるやかに傾斜して立ち上り、壁高は10~12cm。床面は凹凸を呈し、土質は炉周囲が硬くしまっているのを除きやや軟質である。炉は地床炉で床面をわずかに掘り込んでいる。少量の焼土が堆積。柱穴は壁および壁に隣接して設けられる。遺構内中央部で77号土塙の覆土上面に地山褐色土を貼り、やや硬くたたきしめて貼り床としている。本住居が新しい。

#### 6号住居跡（第8図）

調査区の北西側、5号住居跡に隣接して検出された。

プランは長軸2.9m、短軸2.5mの楕円形を呈す。壁はいずれも直立に立ち上がり、壁高は3~6cmである。床面は全体がやや凹凸を呈しており、土性は炉周囲がしまっているのを除くと、比較的軟質である。炉は中央部に位置している。炉内は火熱により赤褐色に硬化している。炉周囲に4個の河原石が検出され、石は部分的に火熱を受け赤変している事から、石圓炉であった可能性がある。柱穴は壁及び壁に隣接して設けられている。

#### 出土遺物

##### 土器（第22図2・3）

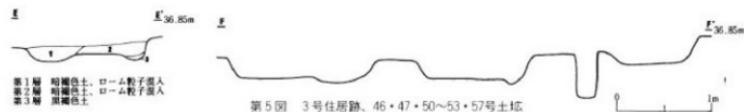
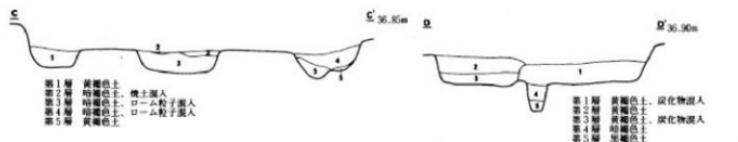
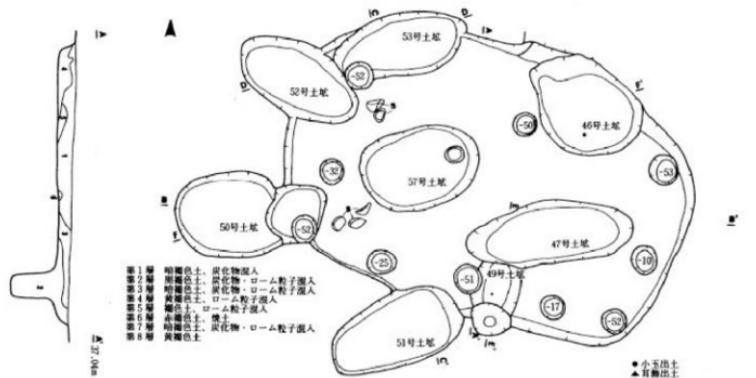
いずれも覆土出土である。2は鉢形土器の高台部分で、地文としてR L 単節斜縄文（横位回転）を施す。3は鉢形土器である。口唇部に4個の突起をもち、1個は大きい。口縁部に4条の平行沈線が巡り、2個1対の粘土瘤が上から2条目に付けられる。口唇部と口縁部に刻み目が施され、体下部に沈線が巡る。地文はL R 単節斜縄文（横位回転）である。

#### 7号住居跡（第9図）

調査区南側において多数の柱穴状ビットと焼土が検出された。焼土はその一部が地山を掘り込んでつくられた地床炉であり、又、柱穴状ビットも一部は炉を巡る形で配列されている。これら炉、柱穴が相互に関連すると思われるもの3例（7号、8号、9号住居跡）については、住居壁が確認されなかったもので、P 1~P 4が主柱穴と考えられる。プランは不明だが5m以上の規模と考えられる。炉は地床炉で、地山を12cm円形に掘り込んで作っている。炉周囲の床面は凹凸を呈し土質はやや軟質である。

#### 8号住居跡（第10図）

P 1~P 4は主柱穴と考えられる。プランは不明であるが、3.8m以上の規模と考えられる。炉は地床炉で地山を20cm円形に掘り込んで作っている。多量の焼土堆積と共に内壁は火熱により赤褐色に硬化している。



第5図 3号住居跡、46・47・50~53・57号土坑

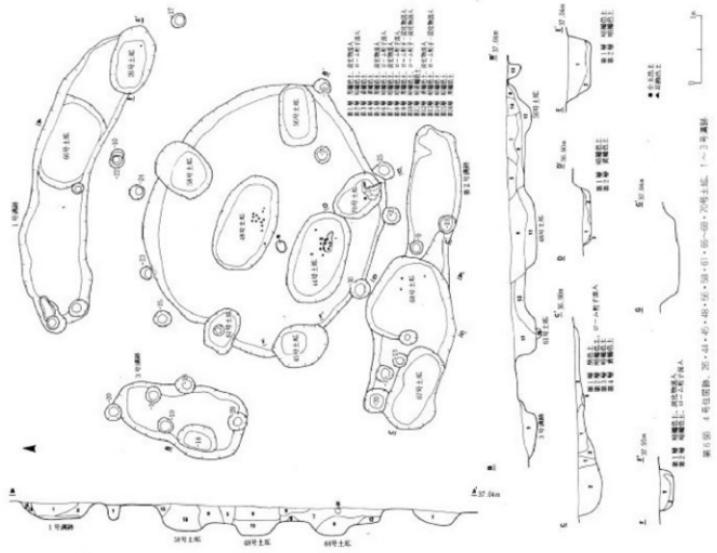
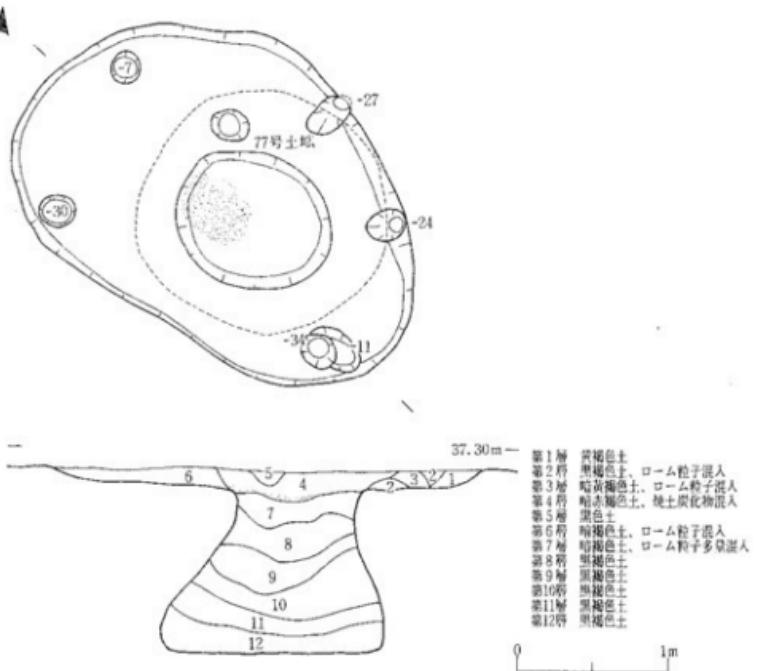
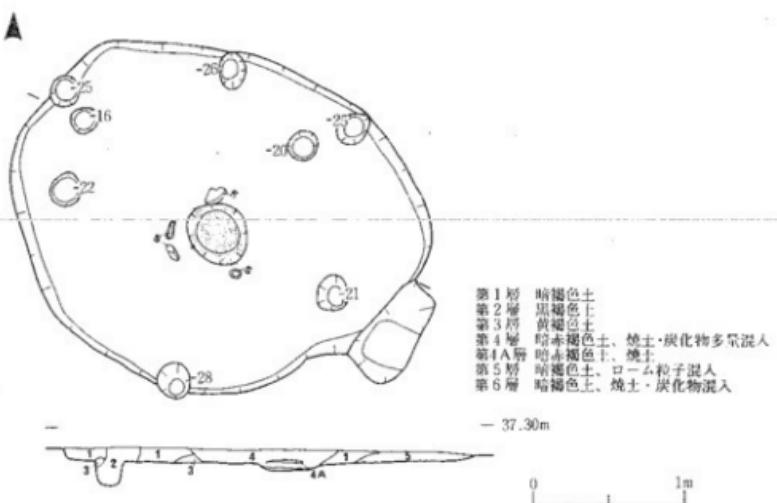


图10 4号标本: 26-43-4; 40-51-3; 55-60-2; 75号土壤。1~3号薄壁组织。



第7図 5号住居跡、77号土壠



第8図 6号住居跡



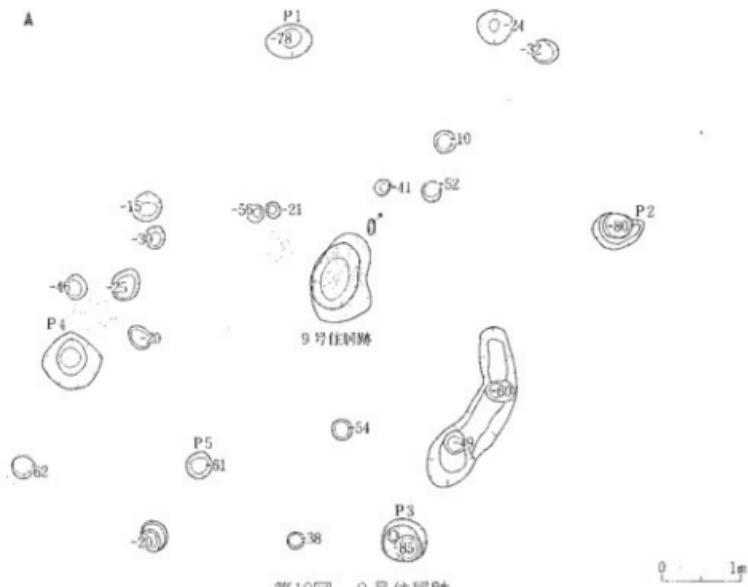
第9図 7号住居跡、8号住居跡

### 9号住居跡（第11図）

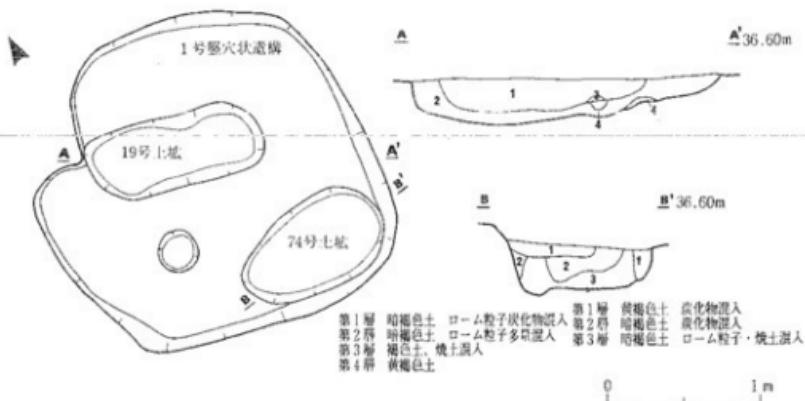
P1～P4が主柱穴と考えられる。プランは不明であるが、4.8m以上の規模と考えられる。炉は地床まで地山を15cm楕円形に掘り込んで作っている。焼土が堆積し底面は赤褐色に硬化している。

### 1号竪穴状遺構（第12図）

調査区南東側の台地縁辺部で検出された。



第10図 9号住居跡



第11図 1号竪穴状遺構、19号土塙、74号土塙

フランは北西端部がカギ状に曲折する略正方形で、1辺が2m。壁はほぼ垂直に立ち上り壁高は18~24cm。底面は凹凸が激しく、遺構内中央部と南側壁寄りで2基の土塙が重複。土塙が新しい。

#### 1号溝跡（第6図）

4号住居跡の北側に隣接して検出された。溝は住居跡の外周に沿って約1周巡っており、幅1~1.2m、長さ4.3m。壁はゆるやかに傾斜して立ち上り、壁高は17~25cm。底面は凹凸を呈しており土質は軟かい。溝内東側で26号土塙、66号土塙と重複。2基の土塙はいずれも土塙墓で、溝よりも新しい。

#### 2号溝跡（第6図）

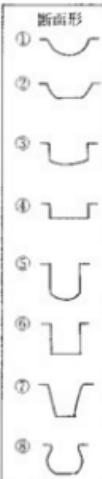
4号住居跡の南側に隣接し、1号溝跡と対称の位置に検出された。住居跡外周を約1周巡っており、幅は0.8m~1m。壁及び底面の状況は1号溝跡と類似し、壁高は15~23cm。底面の各所に柱穴状ピットがみられ、溝内西側で67号土塙、68号土塙と重複、2基の土塙はいずれも土塙墓で、溝よりも新しい。

#### 3号溝跡（第6図）

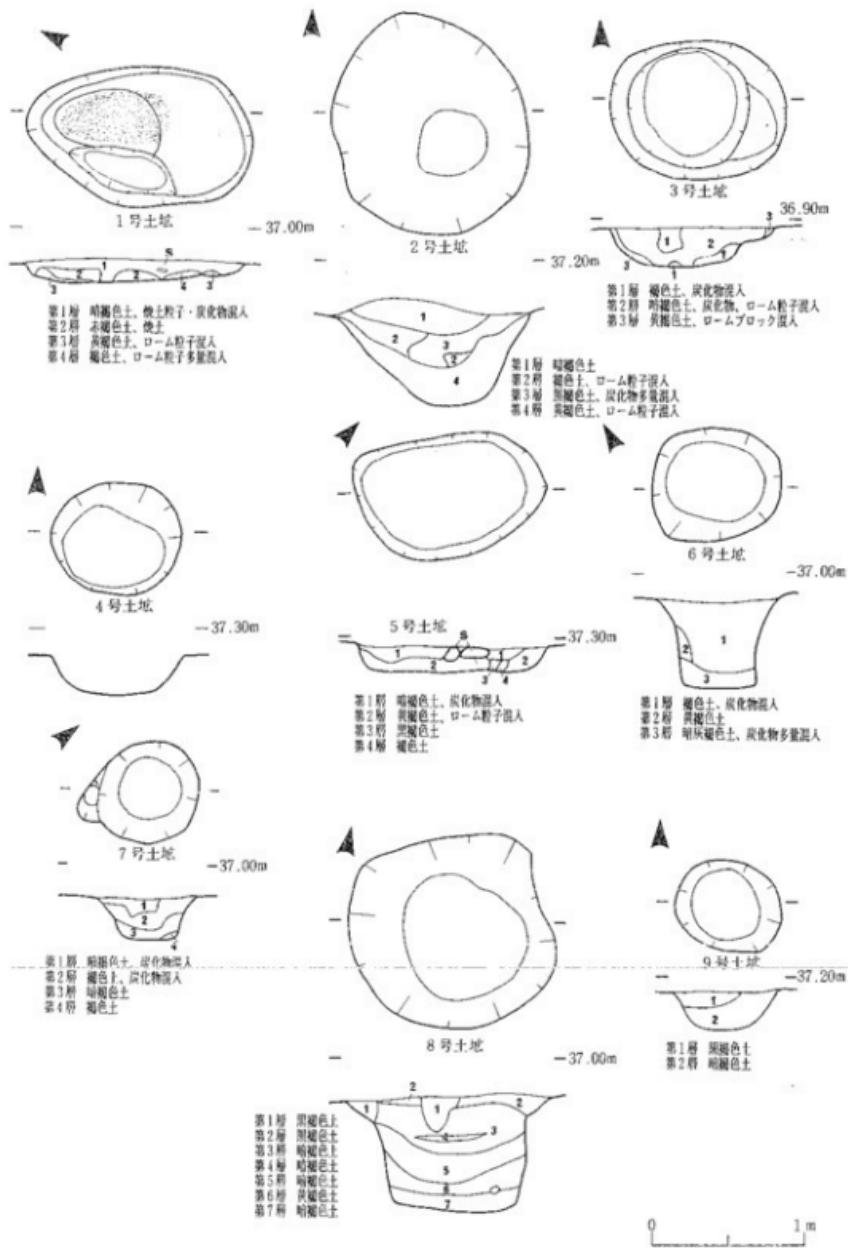
4号住居跡の西側に隣接して検出された。幅0.8m~1m、長さ2mの梢円形を呈する。壁はいざれも傾斜して立ち上り、壁高は15~30cm。壁面、底面とも凹凸を呈しており、土性が軟かい。壁に沿って5本の柱穴状ピットがみられる。

# 土 塚 一 覧 表

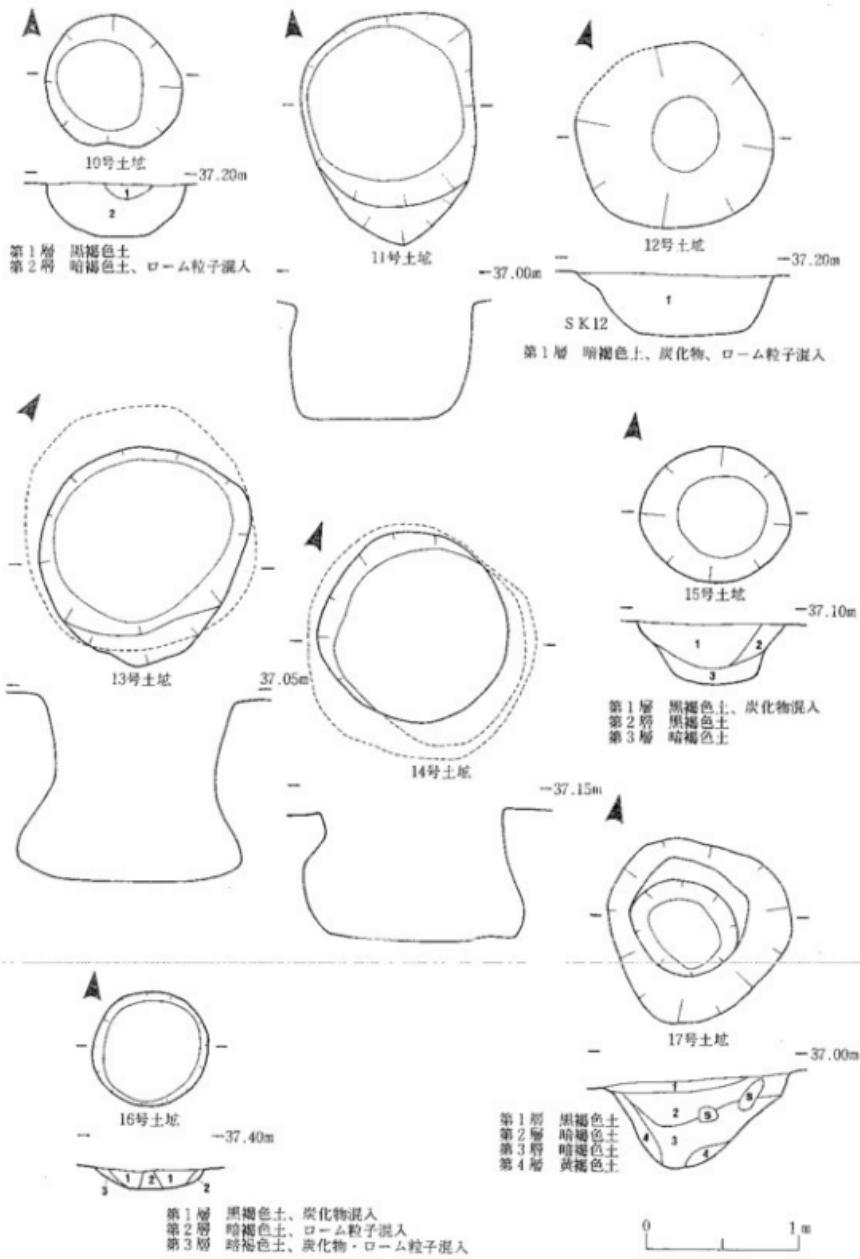
土 塚 番 号	規 模(cm)			平面図	断面形	土 塚 著 長軸方向	出 土 遺 物
	長 軸	短 軸	深 さ				
1 号	150	96	18	椭円形	②		
2 号	150	130	56	椭円形	①		第23図25・26 繩文
3 号	114	90	26	椭円形	②		第23図27 繩文晚期
4 号	82		26	円 形	①		第31図18・19 (へき状石器、燧芯)
5 号	128	84	16	椭円形	②		
6 号	80	74	58	円 形	⑦		第23図28 繩文
7 号	66		30	円 形	②		第23・24図29・30 繩文中期(内蔵上層A式)
8 号	130		76	円 形	③		第24図31・32 繩文晚期
9 号	67	58	24	椭円形	②		
10 号	90		34	円 形	②		第24図33・34 繩文晚期
11 号	154	112	74	椭円形	①		第24図35～42 繩文晚期(大洞A式) 第31図20～22 (石器、石錐、網目)
12 号	122		42	円 形	②		第24図43～45 繩文晚期
13 号	140		120	円 形	⑥		
14 号	126		84	円 形	⑥		第33図29 (磨石)
15 号	96		40	円 形	①		第24図46～52 繩文晚期(大洞A式)
16 号	74		14	円 形	②		
17 号	130	120	54	椭円形	⑦		第24・25図53・54 繩文晚期
18 号	80	60	86	椭円形	⑧		第25図55・56 繩文晚期
19 号	120	50	30	椭円形	③	W19° N	
20 号	120	80	46	椭円形	②	N32° E	第32図23 (石旗)
21 号	119		28	椭円形	①	N28° E	第19図1・2 (1 勾玉、2 土製小玉)
22 号		60	25	椭円形	①		第25図57・58 繩文晚期(大洞A式)
23 号	116	64	20	椭円形	②	W12° N	
24 号	98	62	9	椭円形	②		第25図59・60 繩文晚期(大洞A式)
25 号	188	103	50	椭円形	①		土器片(繩文晚期)
26 号	100	60	34	椭円形	②	W20° N	第19図3 (土製耳飾り)
27 号	151	96	22	椭円形	②		土器片(繩文晚期)
28 号	112		30	円 形	③		
29 号	118		30	円 形	①		第25図61 繩文晚期
30 号	148		49	円 形	①		第25図62～65 繩文晚期 第30図1 (土製品)
31 号	168		34	円 形	②		第25図66～74 繩文晚期(大洞A式)
32 号	160	134	68	椭円形	②		第26図75・76 繩文晚期(大洞A式) 第32図24・25 (石器)
33 号	170	106	36	椭円形	①		第33図30 (くぼみ石)
34 号	72		28	円 形	②		
35 号	104	70	18	椭円形	①		第33図31 (くぼみ石)
36 号	102	86	26	椭円形	①		
37 号	74		24	円 形	⑦		
38 号	80	50	22	椭円形	②		

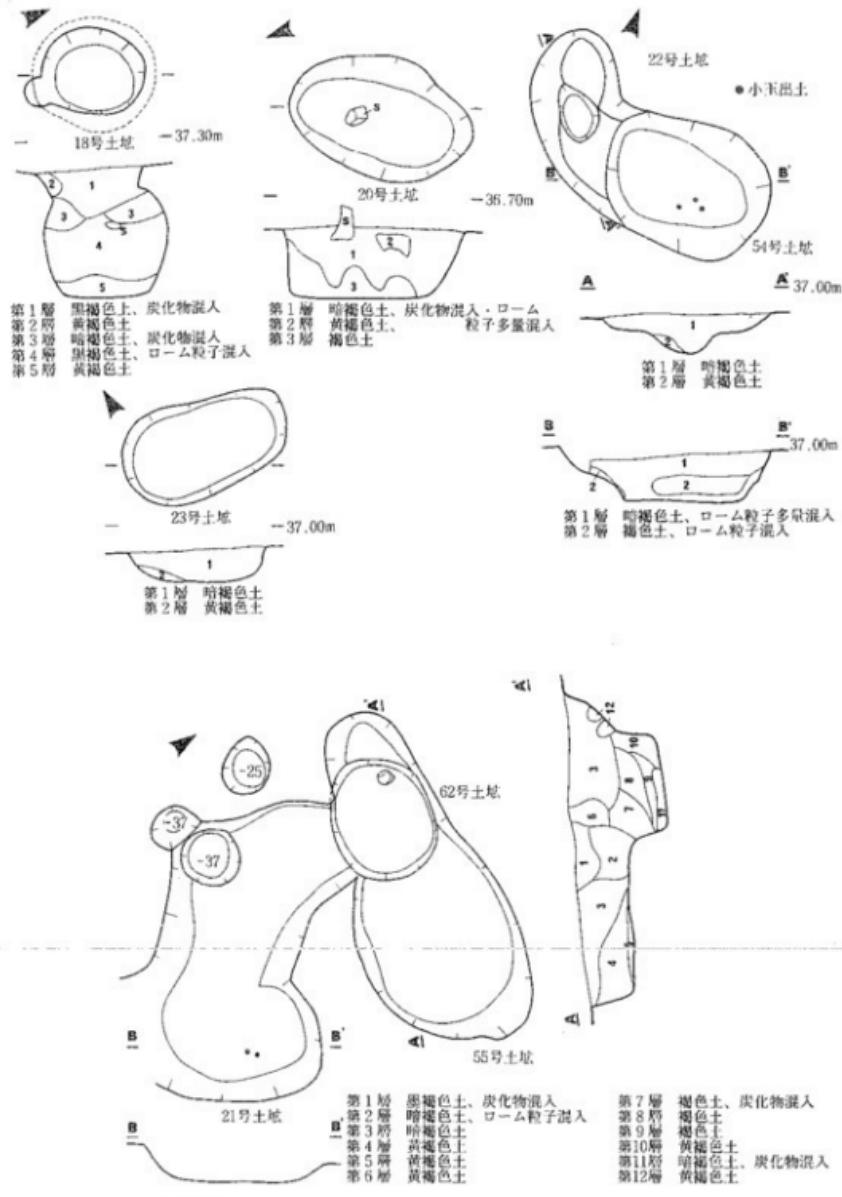


土 坟 番 号	規 模(cm)			平面形	断面形	土 坟 墓 長軸方向	出 土 遺 物
	長 軸	短 軸	深 さ				
39 号	120	90	26	椭円形	①		
40 号	100	62	20	椭円形	④		
41 号	161	106	36	椭円形	②		第32図26 (石器)
42 号	102	84	30	椭円形	④		
43 号	118	84	18	椭円形	②		
44 号	140	80	42	椭円形	②	E 19° N	第19・20図 4~30 (4~5 石製耳飾り、6~21 石製小玉、22~30 石製小玉)
45 号	82	62	22	椭円形	①	N 10° W	
46 号	132	92	28	椭円形	②	W 43° N	第20図31 (石製小玉)
47 号	174	64	28	椭円形	②	W 5° S	
48 号	150	84	38	椭円形	②	W 28° N	第26図27 椭文晩期 第20~21図 62~58 (62~58 石製耳飾り、34~46 石製小玉、47~57 石製小玉、58 石器)
49 号		48	22	椭円形	②	N 15° E	第21図59 (土製耳飾り)
50 号		90	28	椭円形	③	W 4° N	第33図32 (磨石)
51 号	140	64	39	椭円形	①	W 27° S	
52 号	140	76	26	椭円形	③	W 33° N	
53 号	140	68	38	椭円形	②	W 10° S	
54 号	110	86	32	椭円形	②	W 2° N	第21図60~62 (60~62 石製小玉)
55 号		104	30	椭円形	④	W 6° N	
56 号	90	54	38	椭円形	②	W 8° S	
57 号	122	96	22	椭円形	②	W 14° S	
58 号	90	70	36	椭円形	②	N 35° E	
59 号	92		34	円 形	⑦		
60 号	90	48	10	椭円形	②		
61 号	64	46	30	椭円形	②	W 24° N	
62 号	42	66	56	椭円形	②		
63 号	130	70	24	椭円形	③	W 28° N	
64 号	60		62	円 形	⑧		
65 号	122		64	円 形	⑧		土器片 (縄文晩期)
66 号	134	90	22	椭円形	②	W 20° N	
67 号	126	72	34	椭円形	②	W 29° N	
68 号	124		30	椭円形	②	W 28° N	
69 号	70	52	22	椭円形	②		
70 号	80	54	25	椭円形	①	W 48° N	第21図63・64 (63 石製小玉、64 刻片)
71 号	78	64	40	椭円形	②	W 19° N	
72 号	134	94	12	椭円形	②		
73 号	60		22	円 形	①		第26図78 縄文晩期(大洞A式)
74 号	100	64	34	椭円形	②	W 6° S	
75 号	56		38	円 形	⑥		
76 号	98	80	54	椭円形	⑦		
77 号	145	107	106	椭円形	⑧		土器片 (縄文晩期)

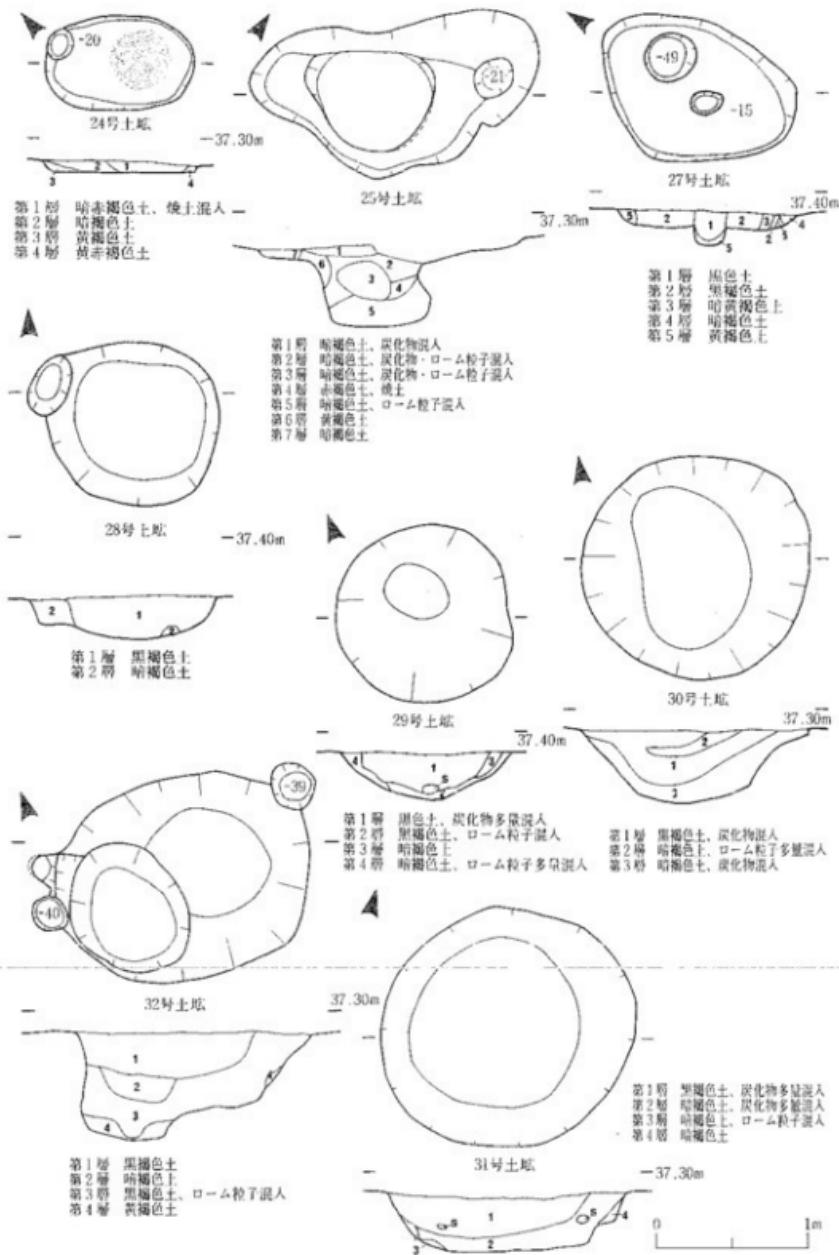


第12図 土壌

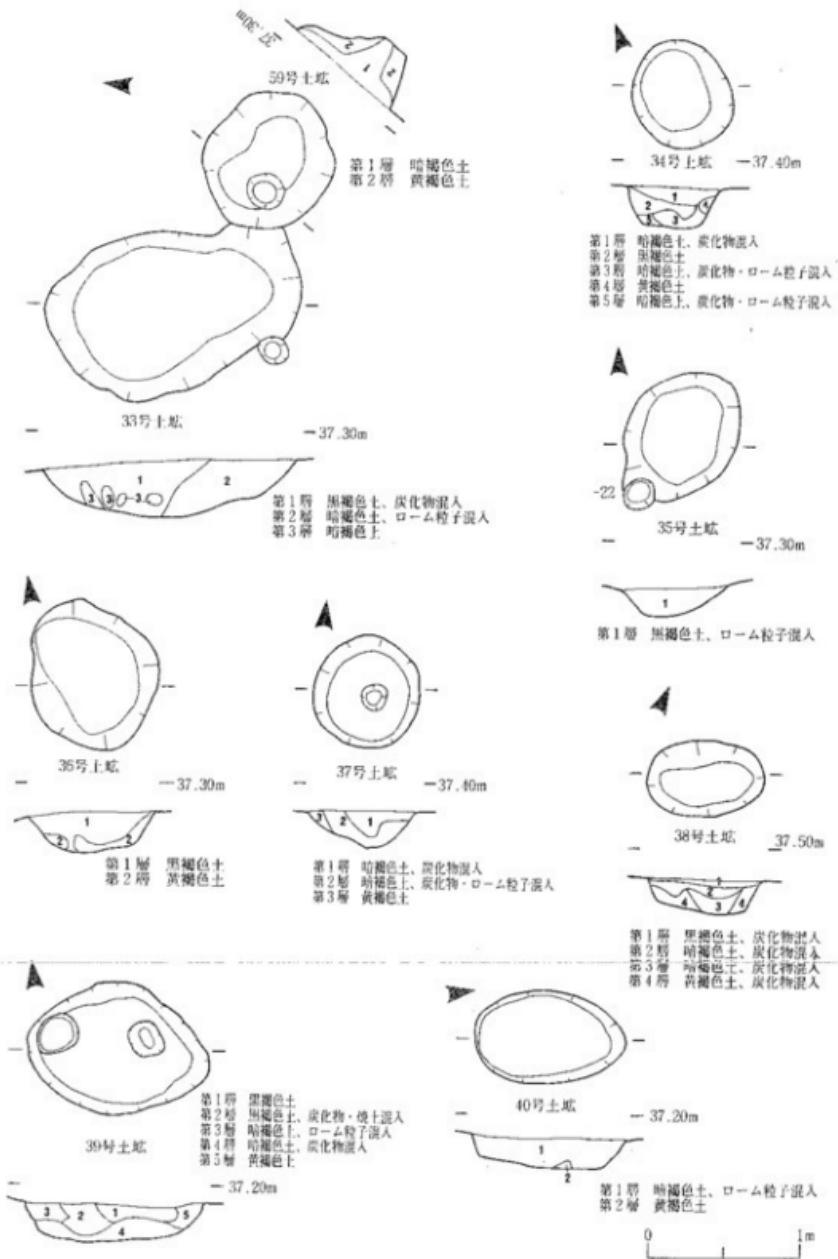




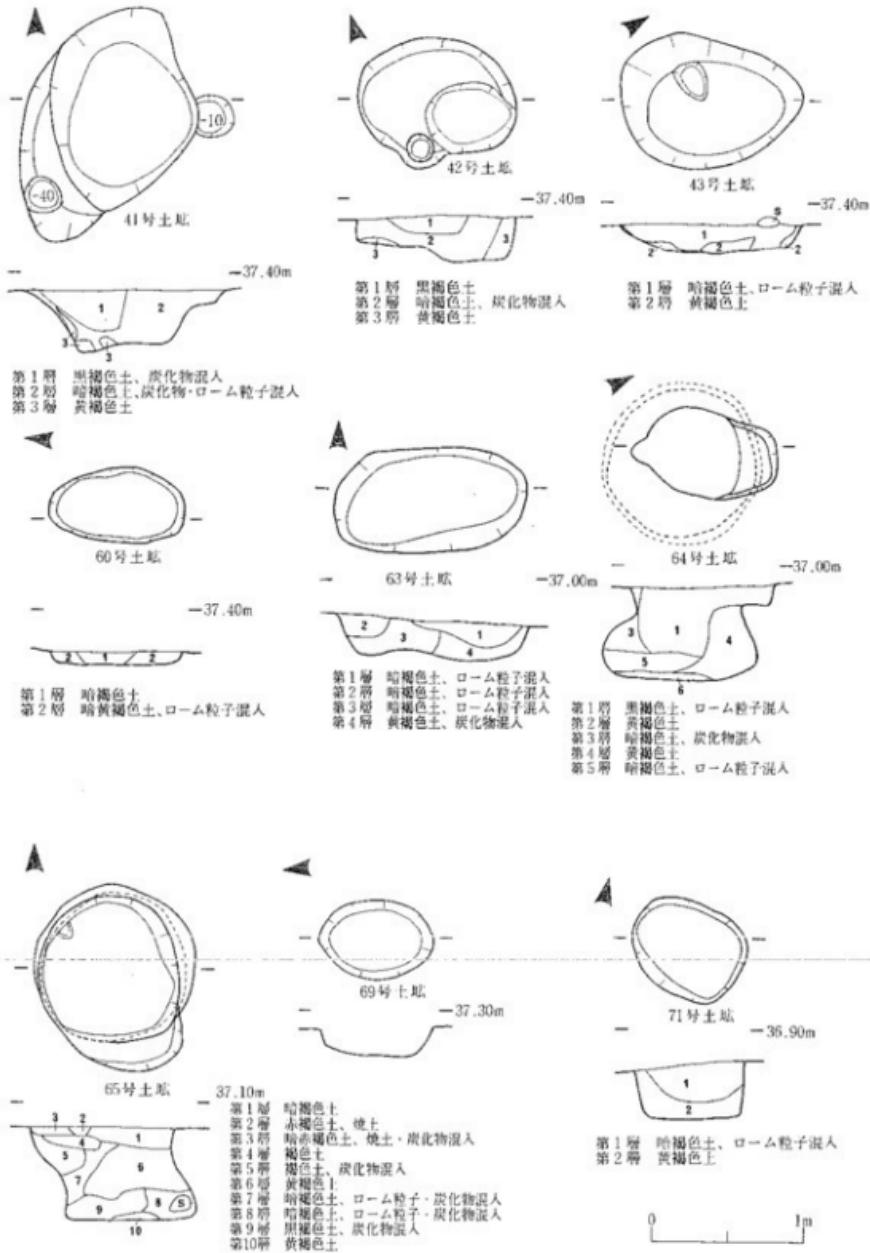
第14図 土塝



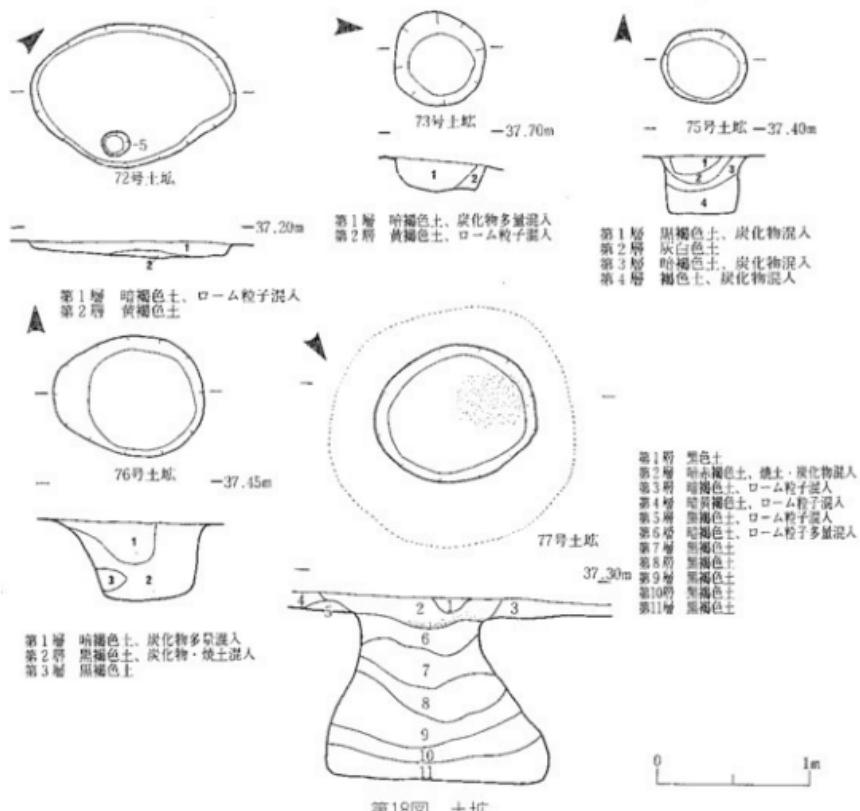
第15図 土塙



第16図 土塙



第17図 土塚



第18図 土壙

### 土壙墓出土遺物

#### 土製品（第19～21図 3～27・32～46・59・65）

3～5・32～33・59・65は耳飾りである。中心部に孔を穿ち、内外面にベンガラを塗っている。

6～27・34～46は玉類で、形状から次の様に分類される。

1類（27・34・35） 小玉で側面は無文のもの。全てベンガラを塗っている。

2類（6～26） 小玉で側面に沈線が一回するもの。全てベンガラを塗っている。

3類（36～46） 瓢箪形を呈するもので、孔は側面に穿たれる。全てベンガラを塗っている。

#### 石器・石製品（第19～21図 1・2・28～31・47～58・60～63）

58は有茎の石鏡である。他は玉類で、形状から次の様に分類される。

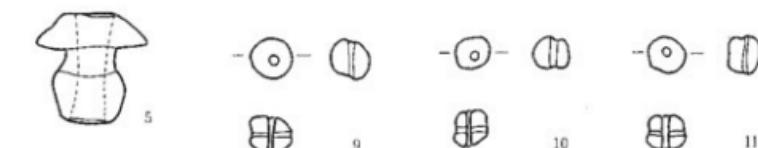
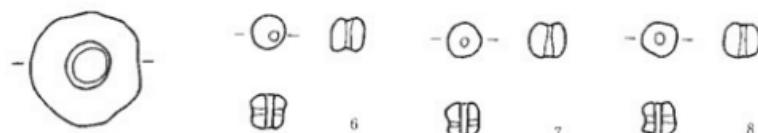
1類（47～57） 小玉で扁平な円筒形を呈するもの。石質は緑色凝灰岩である。

2類（28～31・60～63） 小玉で、1類に比べて長い円筒形を呈するもの。石質はヒスイ製であ

る。

3類(2) 管玉状になるもので、石質はヒスイ製である。

4類(1) 勾玉状のもので、石質はヒスイ製である。

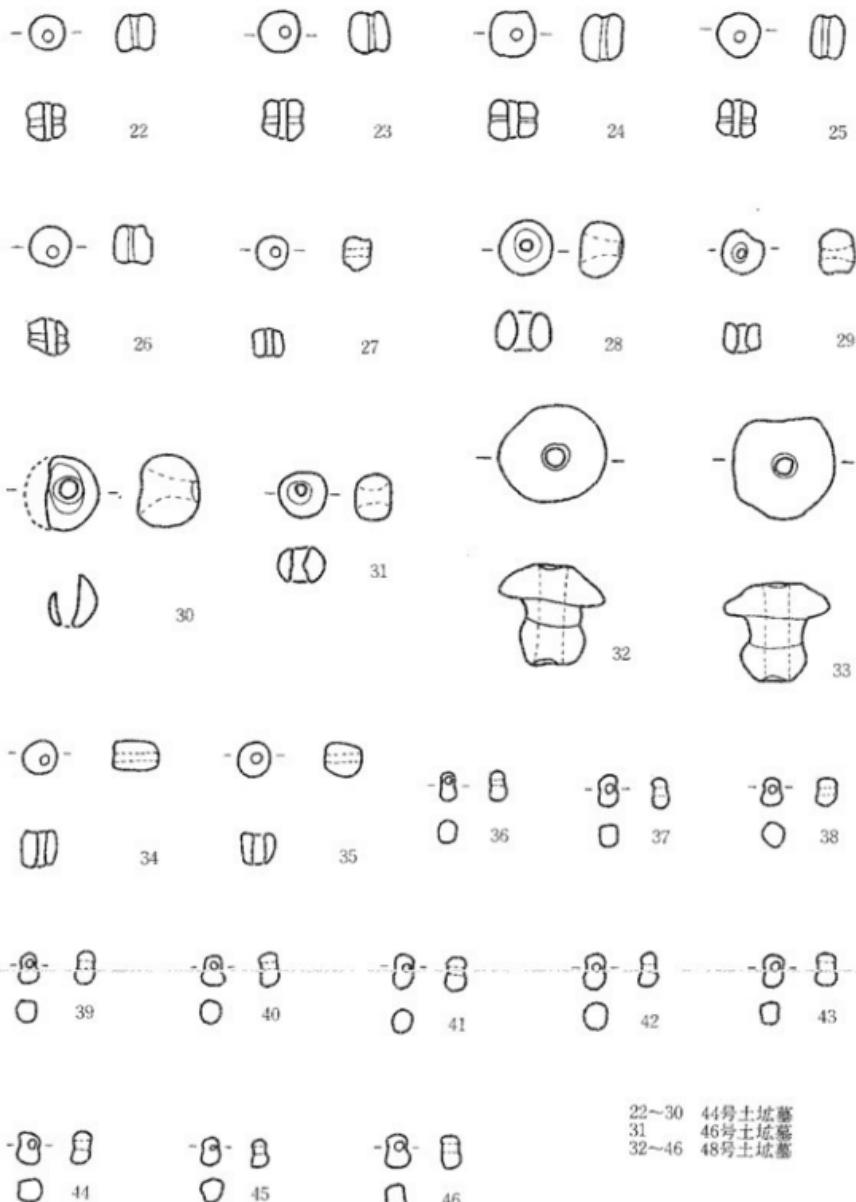


- 1 - 2 21号土塙  
3 26号土塙  
4 - 21 44号土塙

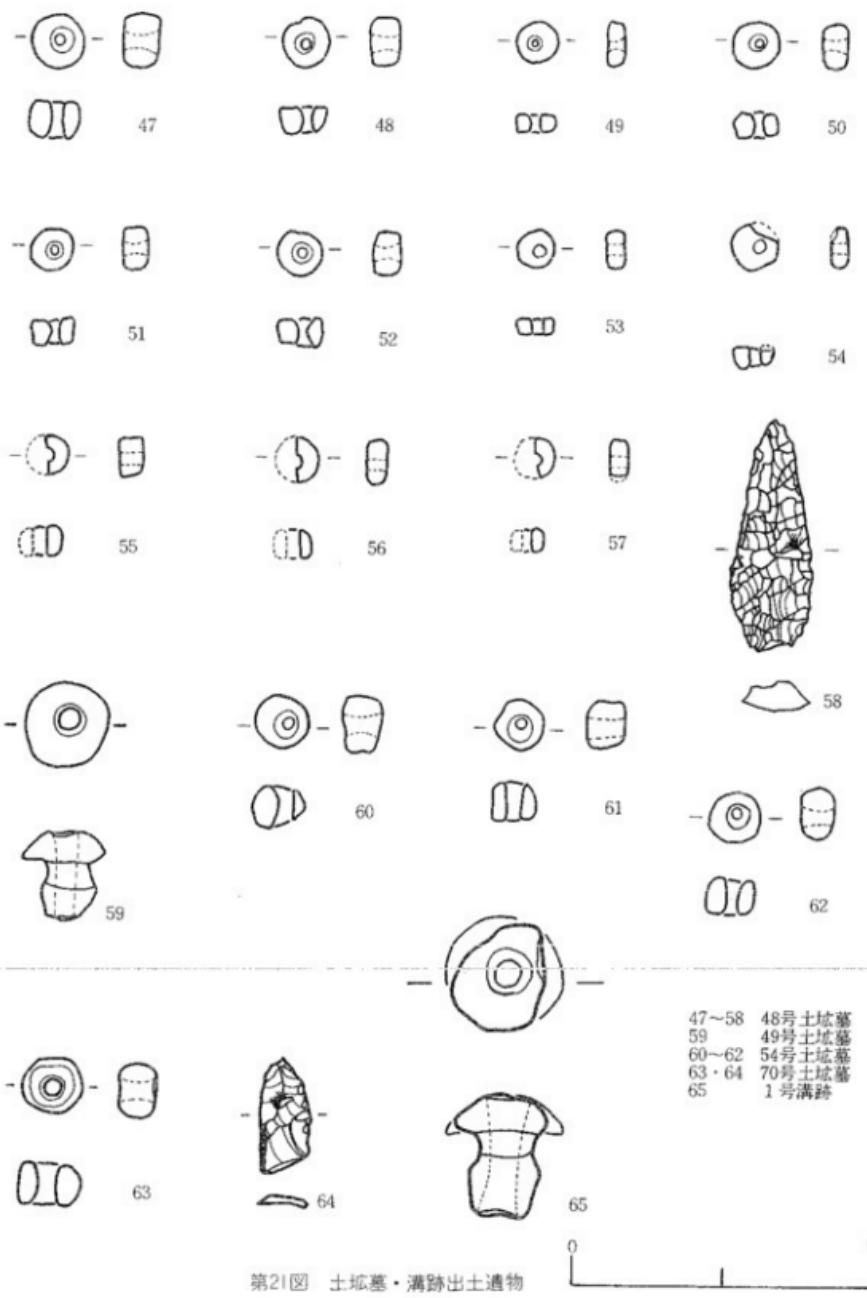


第19図 土塙出土遺物





第20図 土塚墓出土遺物



第21図 土塚墓・溝跡出土遺物

## 出土土器

遺構内、遺構外出土土器について施文様から群別し、さらに器形から類別した。

### 1群土器（第23図15・16・30、第27図80）

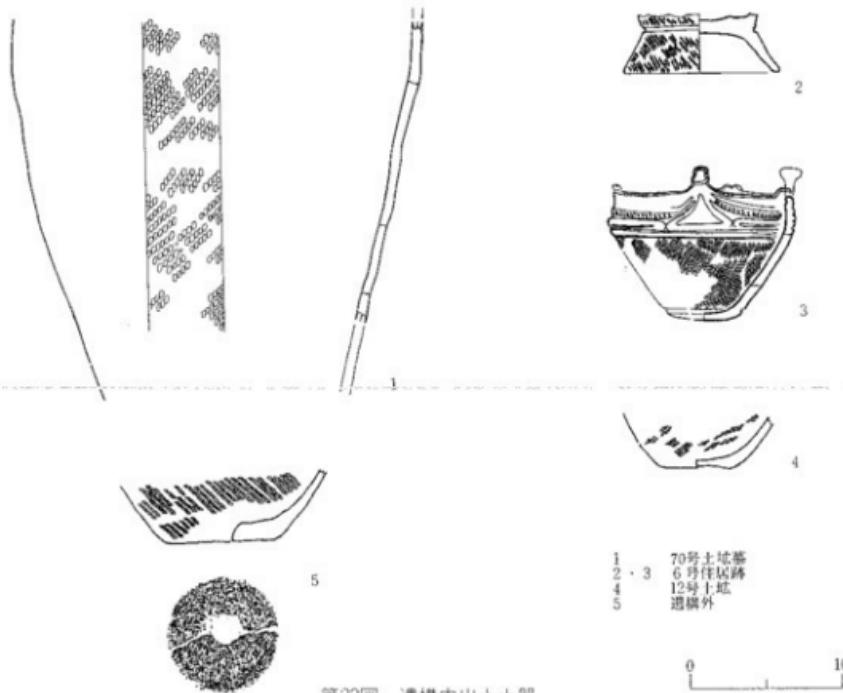
A類（15・16・30・80）：口縁部に単輪絞状体圧痕を平行に施文するもの（30）で、胴部破片の15・16・80には木目状撻糸文が施される。30の口縁部には粘土紐貼り付けによる懸垂文がみられ、頸部には隆帯が巡る。

### 2群土器（第23図29、第27図79）

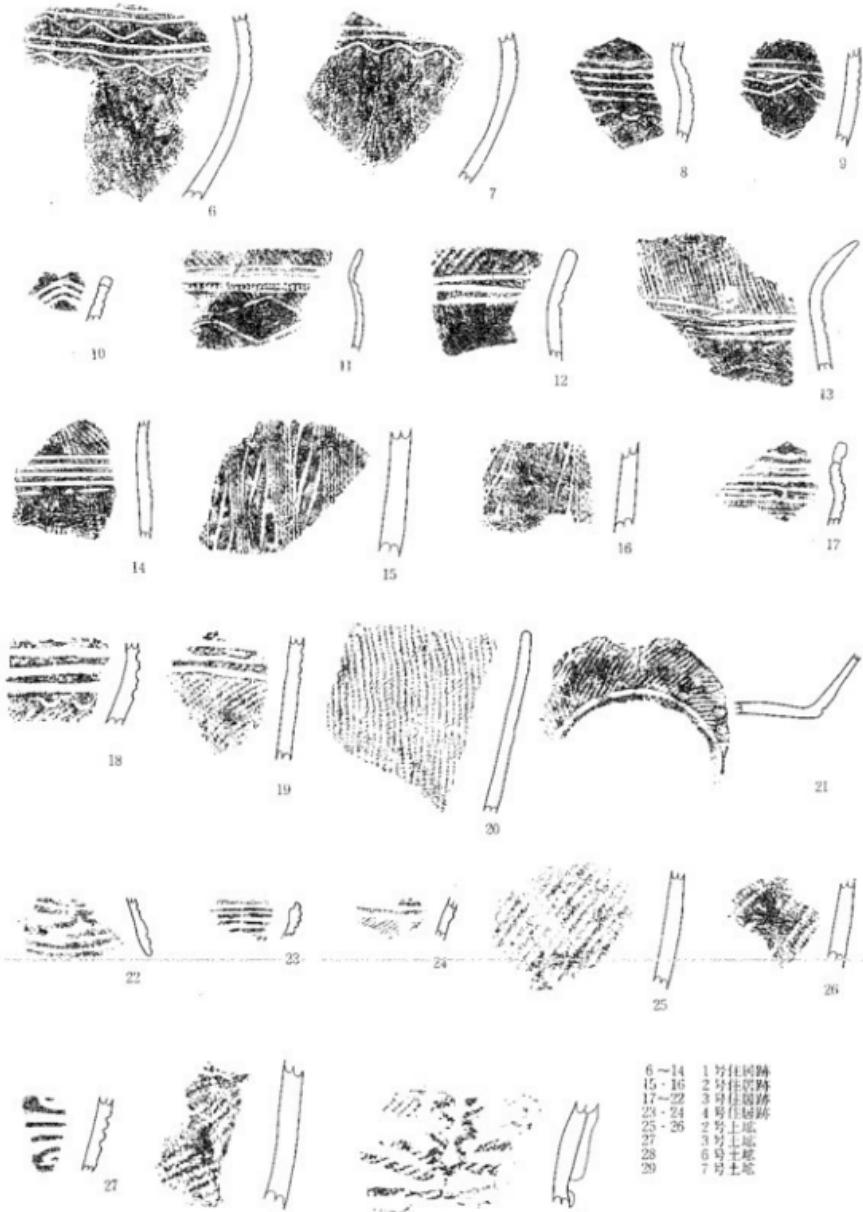
A-3類（29・79）：口縁部が外反する深鉢形土器である。口縁部に粘土紐貼り付けによる隆帯を施すもの（29）、口縁部に単輪絞条体圧痕を平行に施文するもの（79）である。29は隆帯上にも単節繩文が施される。79は1群土器の30よりも口縁部の幅が広く、器肉も厚い。

### 3群土器（第24図33、第27図81～84）

B類（33・81～84）：沈線によって区画された磨消繩文手法により、雲形文が施される。雲形文は直線化したものが多く、入組工字文状の意匠を呈するものもある。口縁は平縁である。



第22図 遺構内出土土器



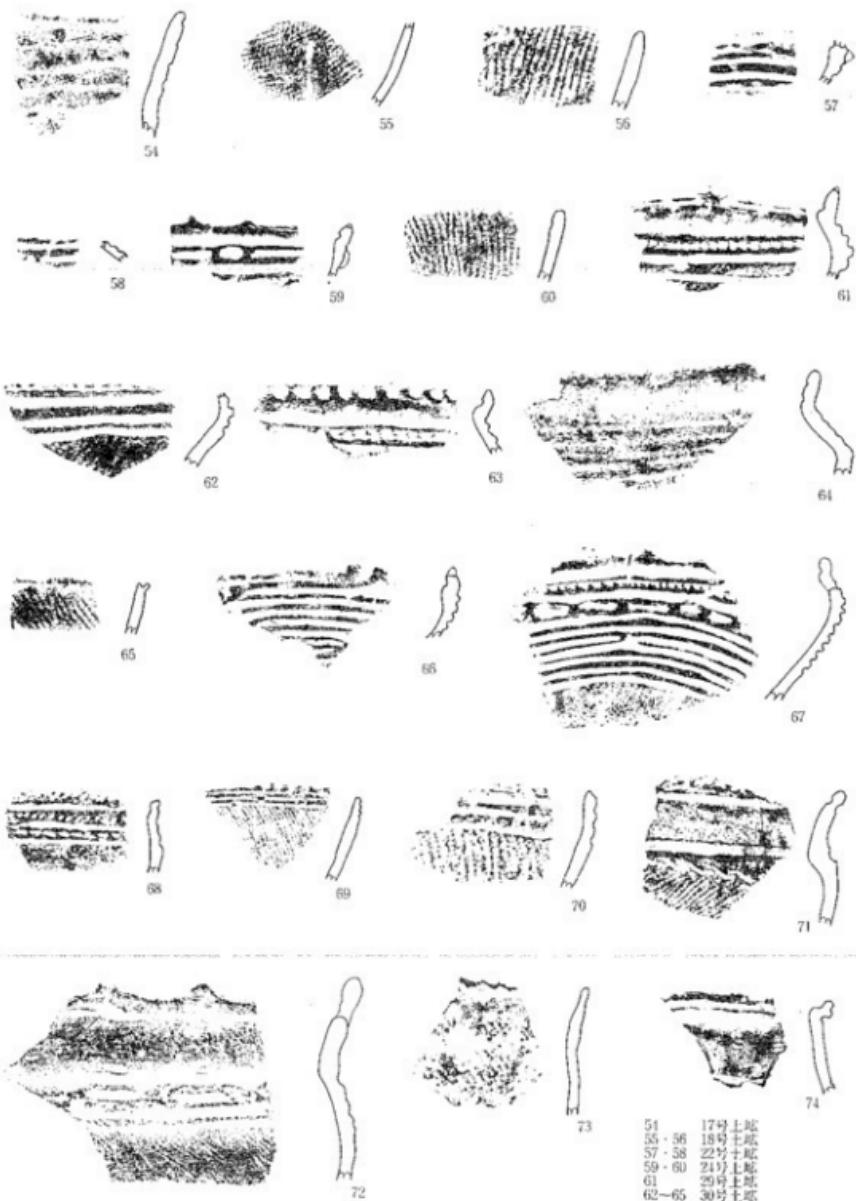
第23図 遺構内出土土器

6 ~ 14	1号住居跡
15 ~ 16	2号住居跡
17 ~ 22	3号住居跡
23 ~ 24	4号住居跡
25 ~ 26	2号上部
27	2号上部
28	3号上部
29	7号土器

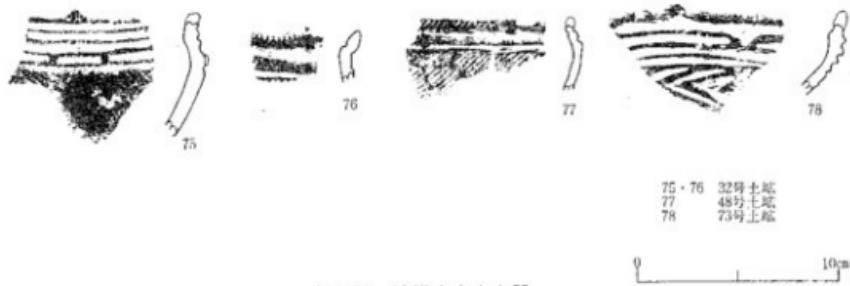
0 1 10cm



第24図 遺構内出土土器



第25図 遺構内出土土器



第26図 遺構内出土土器

#### 4群土器（第22図3、第27図85）

**B類（3・85）**：口縁部に工字文類似の文様を沈線で施し、大型の把手状突起が1個口縁に付帯する。

**5群土器（第23図17・22・23、第24図35・36・46～49、第25図58・59・66・67・75・78、第27・28図86～103）**

**B類（17・22・23・35・36・45～49・58・59・66・67・75・78・86～103）**：平行沈線と沈線間に作り出された彫刻的手法により浮隆的な工字文を施す。工字文は浮隆線間に刺突や縞状、エ字状の陰刻を加えて作り出している。口縁は平縁の他、山形状やB状突起を付するものもある。又、文様帶の上端に1条の刻口列を巡らすものや78の様に杉綾状の陰刻文を付帯して施すものもある。

**6群土器（第23図19、第24図37～45、50～53、第25図54・59・61～64、68～70、第26図76・77、第28図104～117）**

**B類（19・37～45・50～54・59・61～64・68～70・76・77、104～117）**：口縁部に2～3条、もしくはそれ以上の平行沈線を巡らすもので、沈線間に刺突列点文を加えるものもある。口縁は平縁の他、山形状やB状突起が付され、平縁の場合口唇部に押圧縦文を施すものが多い。

#### 7群土器（第24図31、第25図71～74、第28・29図118～126）

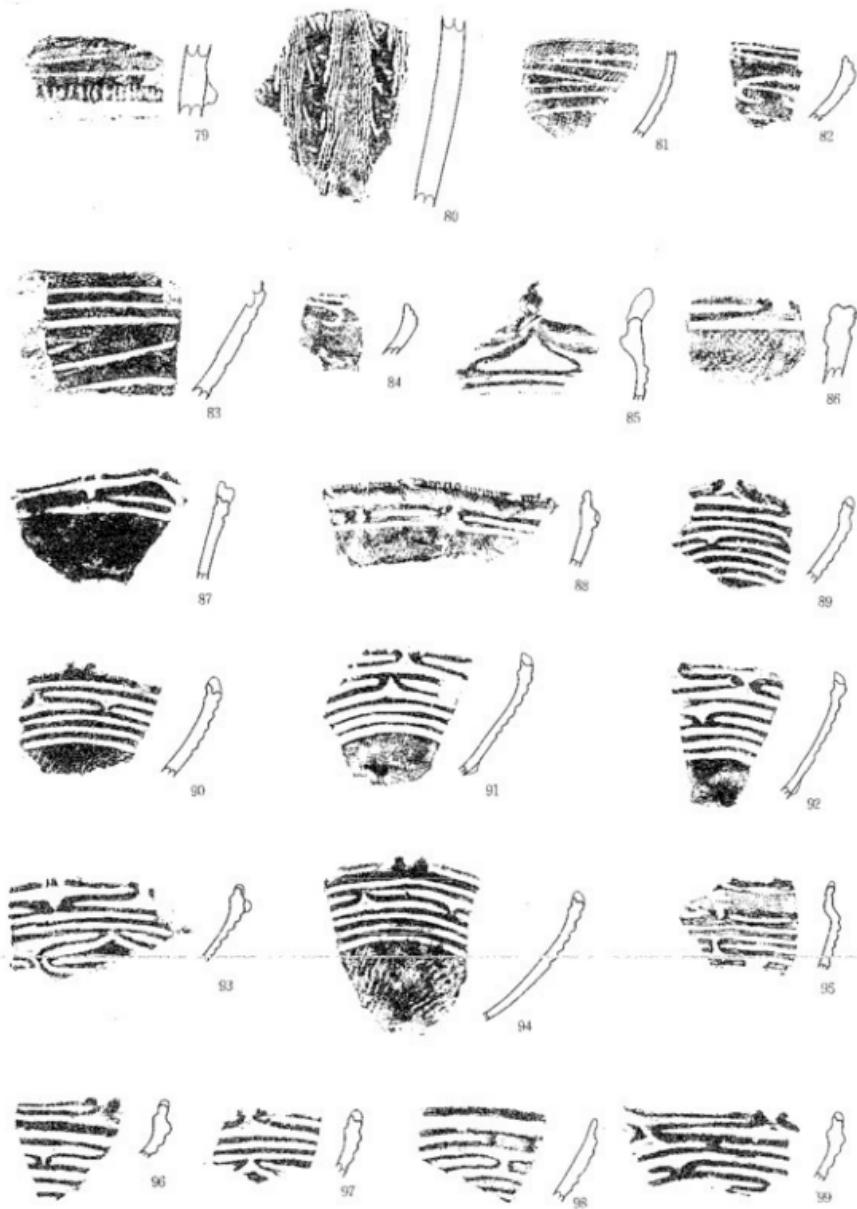
**B類（31・71～73・118～124）**：口縁部を磨消し無文帶としたもので、無文帶部分に1～2条の沈線を施すものや、71の様に胴部との区画部分に綾格文を1条巡らすものもある。口縁は波状口縁のものが多い。

**B類（74・125・126）**：壺形土器の口頸部で、口頸部上端に1条の沈線や刻口列を巡らす。沈線の場合、沈線間に2個1対の突起を付した工字文風の意匠を施している。

#### 8群土器（第23図6～14）

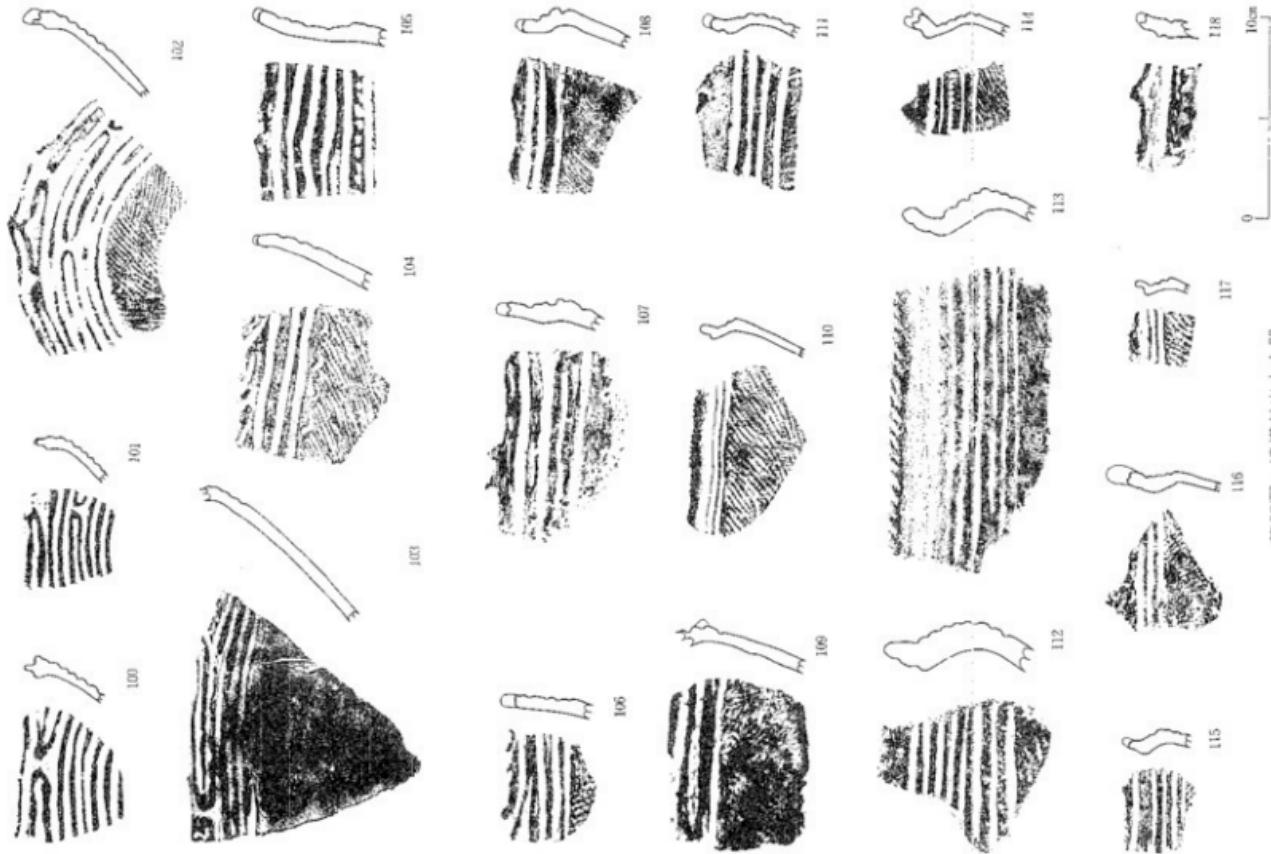
**B類（6～11）**：沈線により鉈齒状文や菱形文を施すもので、鉈齒状文は平行沈線を基調に、その下位や沈線間に連続して施される。

**B類（12～14）**：口縁部に2～3条の平行沈線を巡らすもので、地文として縦文の他、刷毛目文



第27図 遺構外出土土器

0 10cm



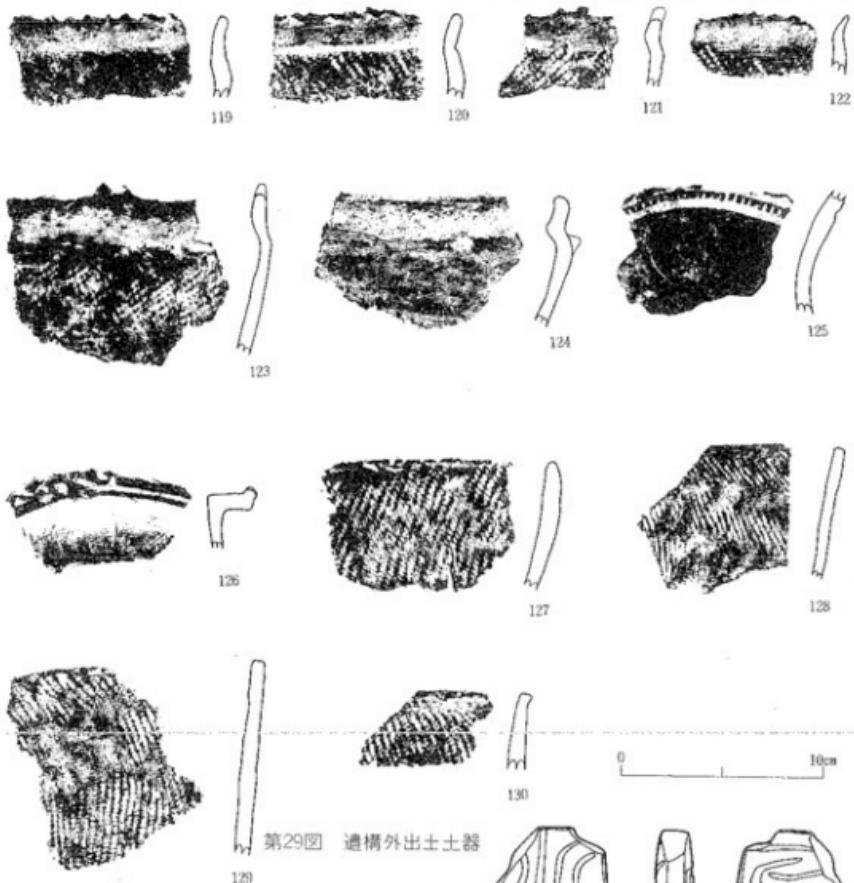
第29圖 遺物外出土器

が施される。刷毛目文の場合は内面にも同様な施文が行なわれる。

9群土器（第22図1・2・4・5、第23図20・21・25・26・28、第54図34、第25図55・56・60、第29図127～130）

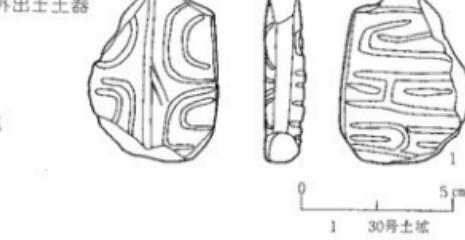
上記の分類以外のものを一括した。

B類（1・2・4・5・20・21・25・26・28・34・55・56・60・127～130）：粗製土器で、地文として単節斜罫文の施されるものが多い。2は高台である。5は底部で、底面に孔を穿っている。

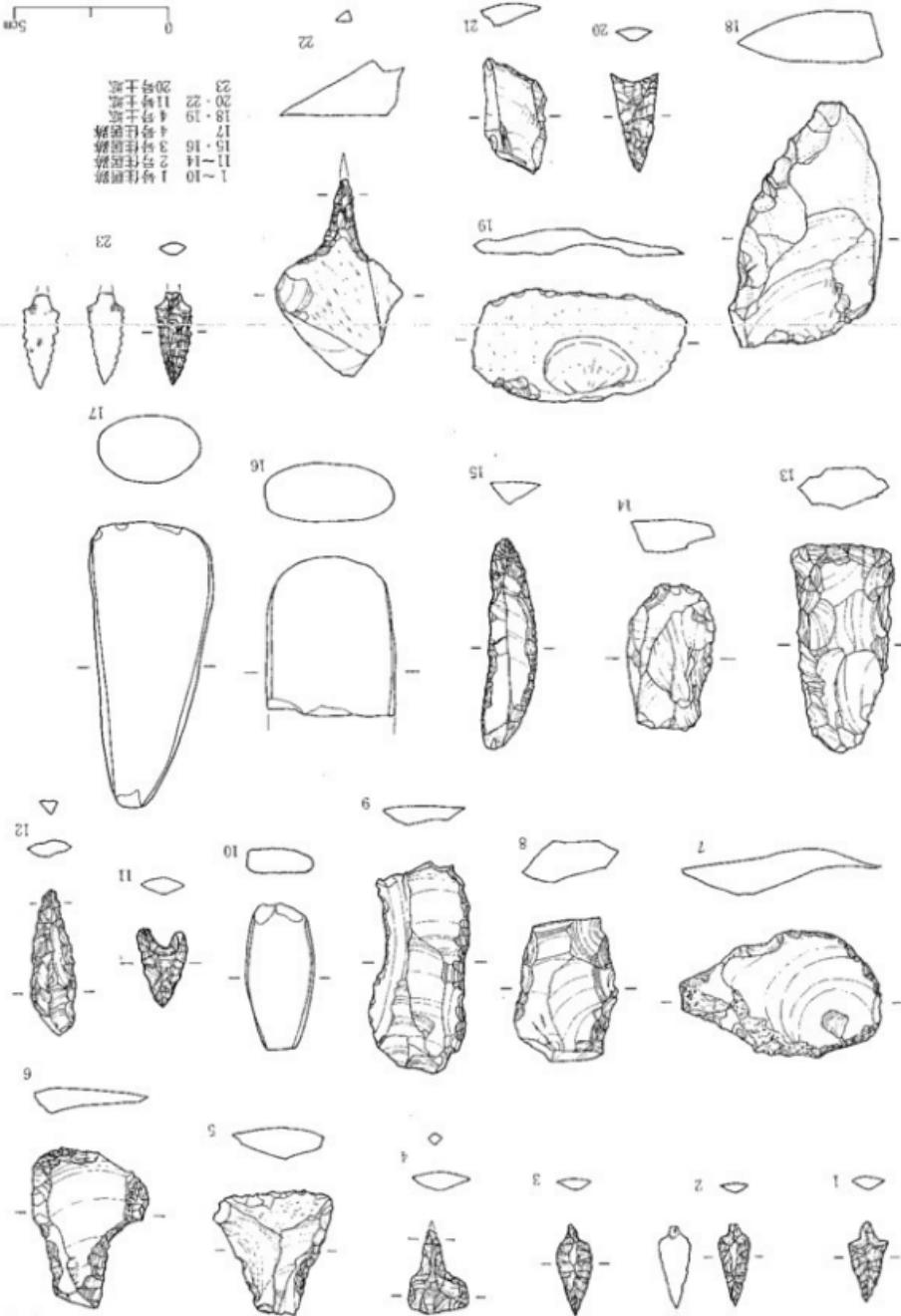


#### 土製品（第30図1）

土版である。縦平で、沈線による直線・弧線を施して文様を作り出している。



第31圖 遺物內出土石器



遺構外出土石器（第34～38図）

**石鎌**（第34図33～41）：有茎・無茎のものがあり、38はアスファルトが付着する。36は黒曜石製、他は硬質頁岩製である。

**石錐**（第34図42）：錐部が途中で折れている。硬質頁岩製である。

**石匙**（第34図43～48）：縦型をなすものと、横型をなすものがあり、45が片面加工、他は両面加工である。47のつまみ部にはアスファルトが付着する。硬質頁岩製である。

**ヘラ状石器**（第34・35図49～62）：両面加工で、撥形をなすものである。硬質頁岩製である。

**搔器**（第35図65～69）：68は両面加工でアスファルトが付着し、他は片面加工である。硬質頁岩製である。

**削器**（第35図63・64）：63は両面加工64は片面加工である。硬質頁岩製である。

**磨製石斧**（第36図70～74）：全て破損している。凝灰岩製である。

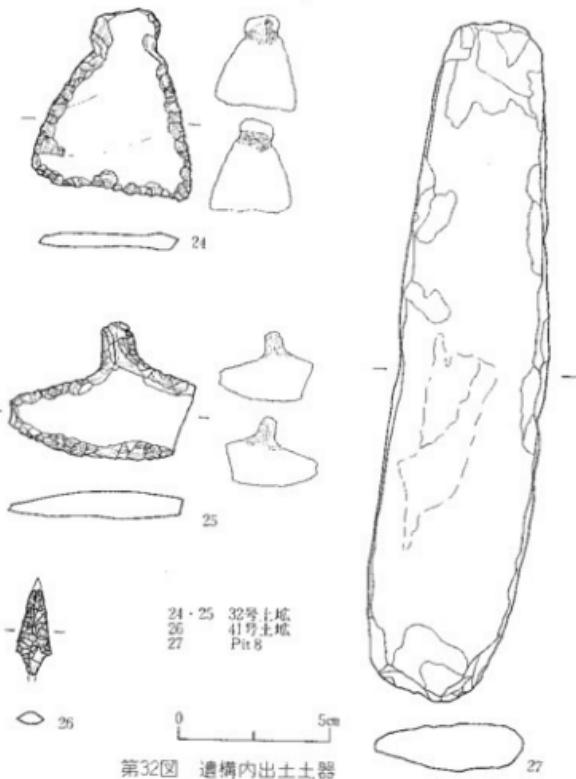
**石剣**（第36図75）：粘板岩製である。

**石棒**（第36図76）：破損品で、粘板岩製である。

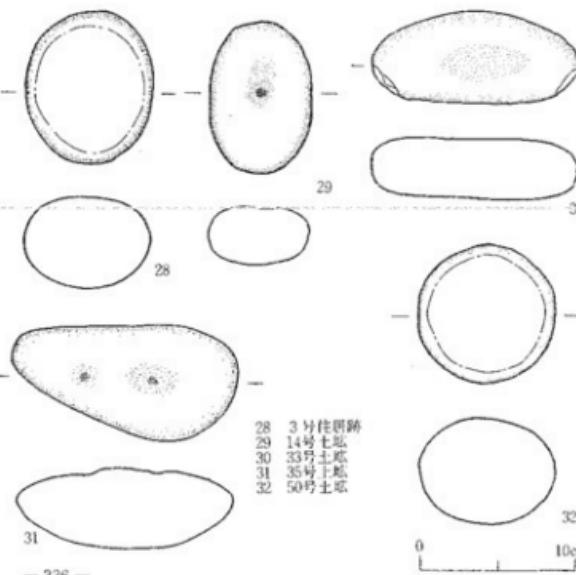
**石錐**（第37図77～79）：両端を打ち欠くものである。

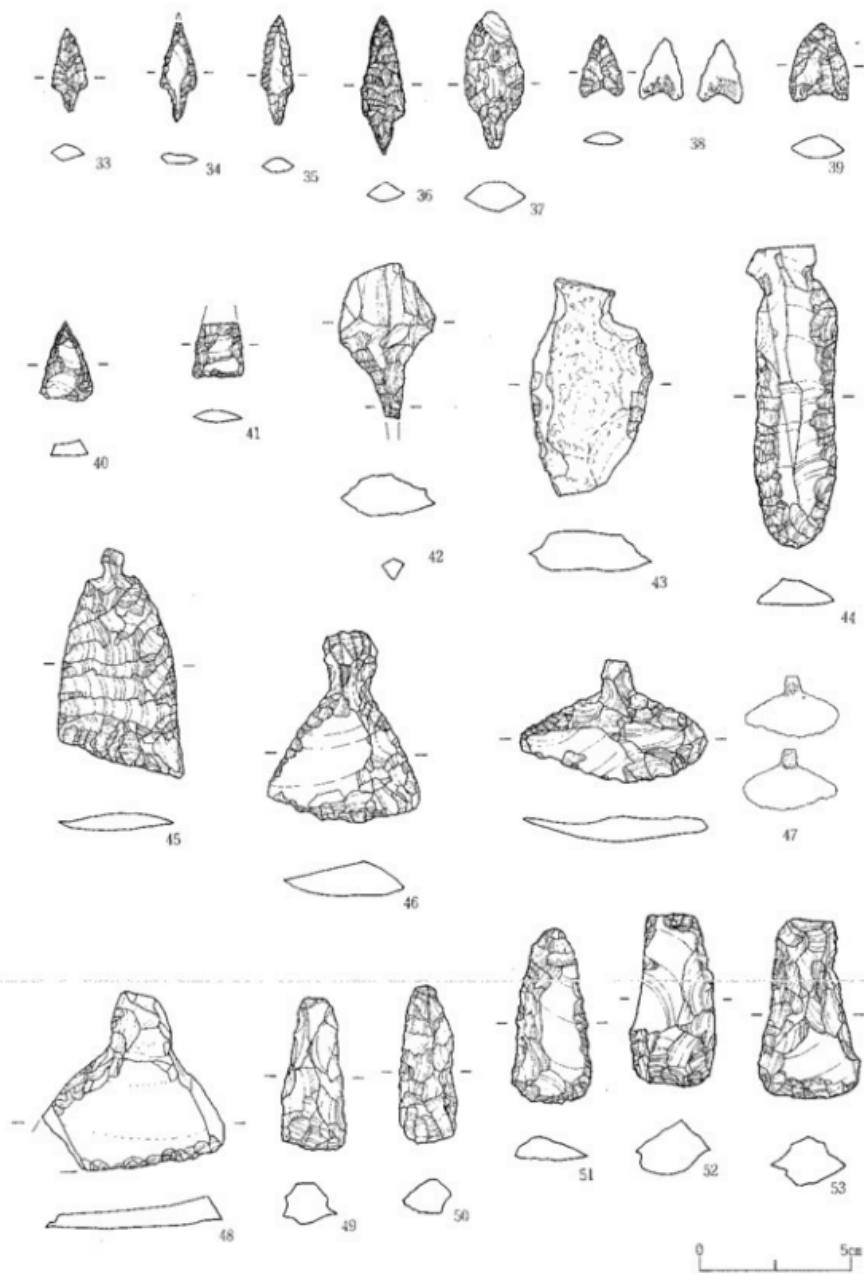
**くぼみ石**（第37・38図80～95）：くぼみ部が複数のもの、片面・両面のものがある。

**磨石・敲石**（第38図96～103）：全面が磨れるもの、側面に敲打痕の認められるものもある。

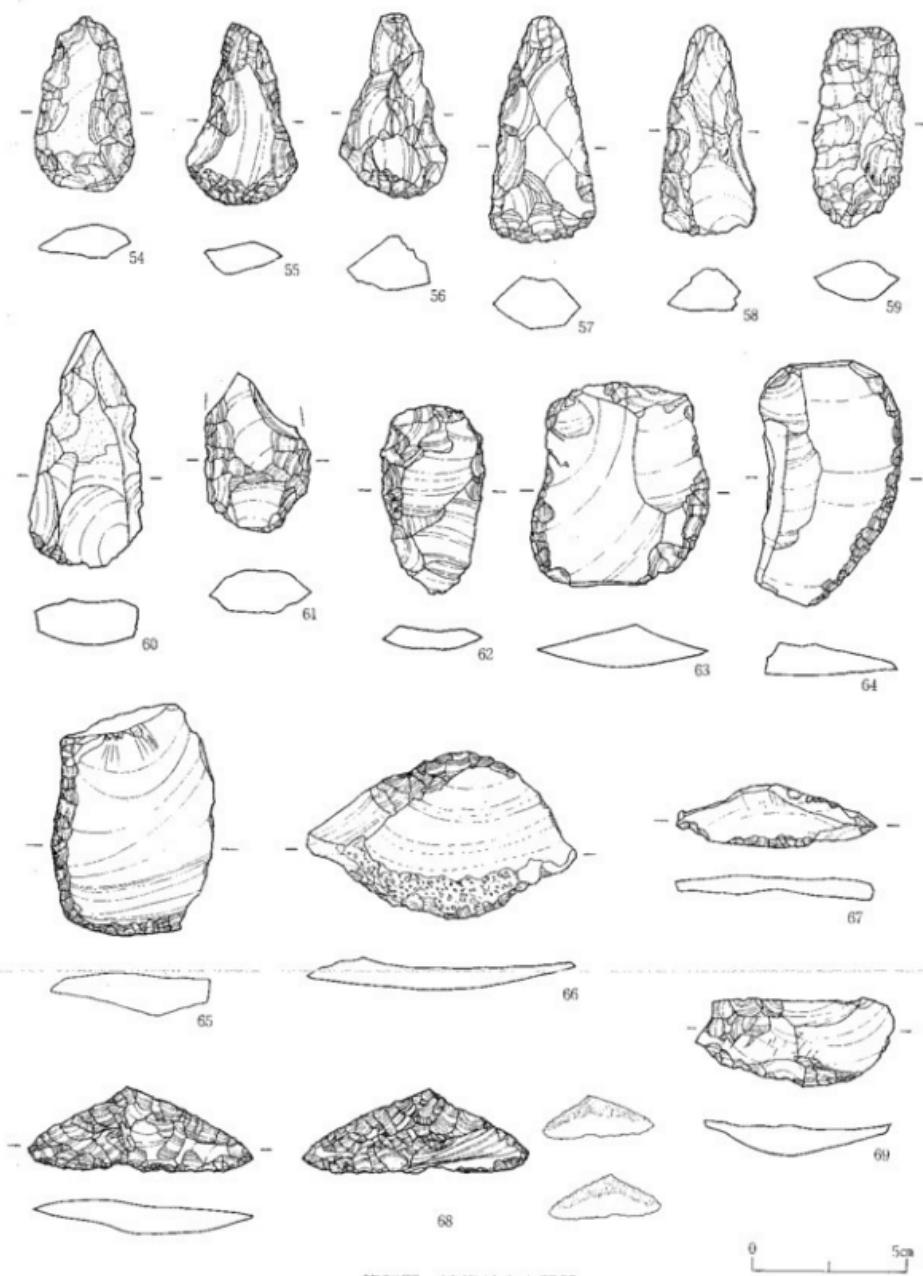


第32図 遺構内出土土器

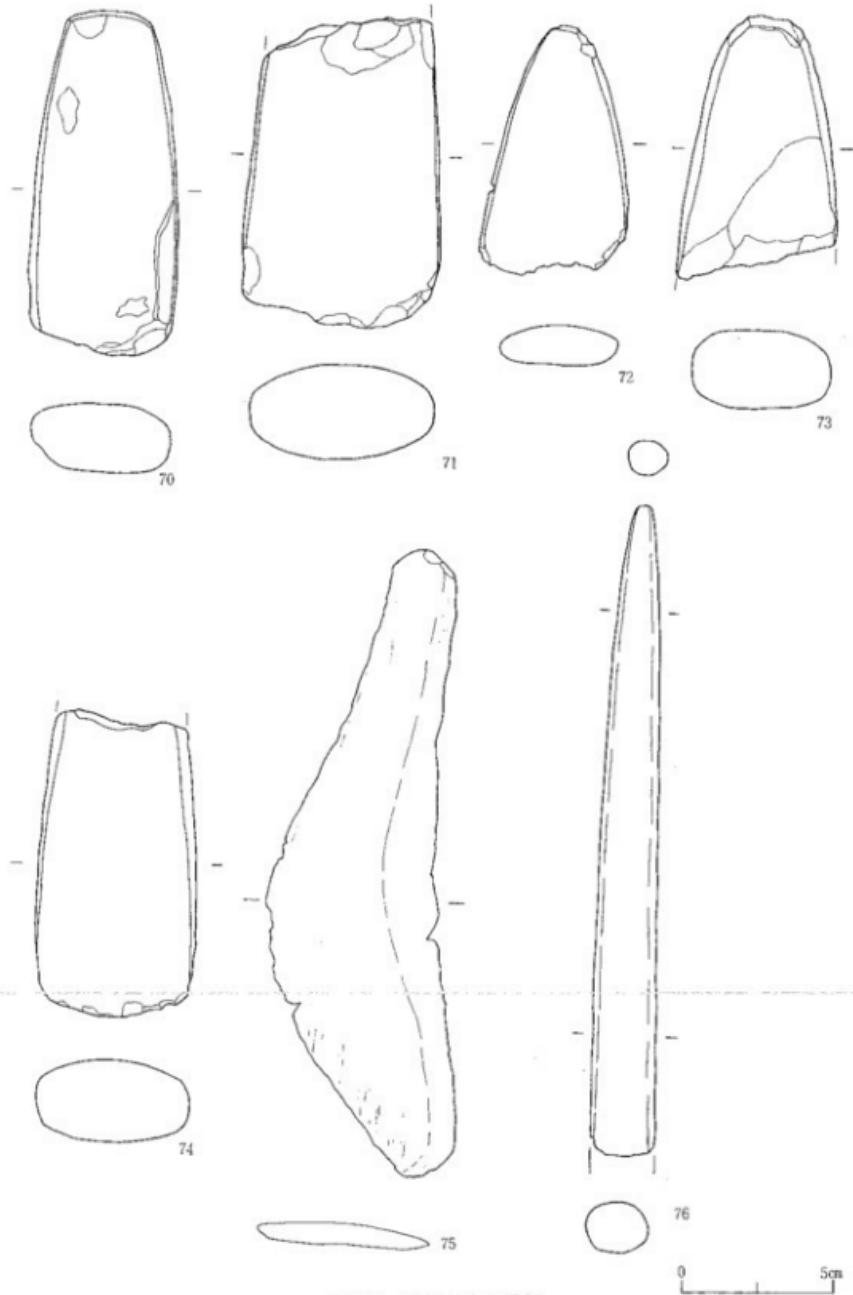




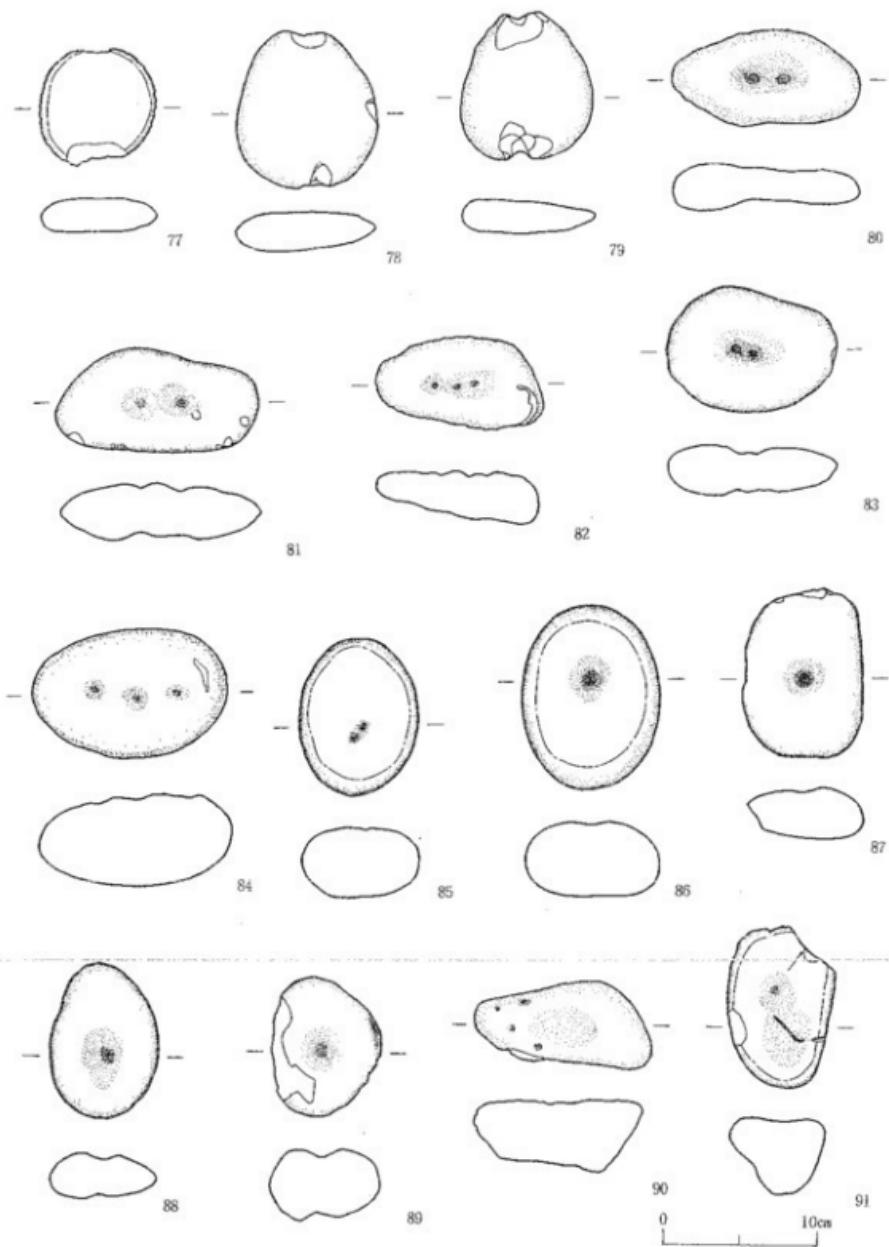
第34図 透構外出土石器



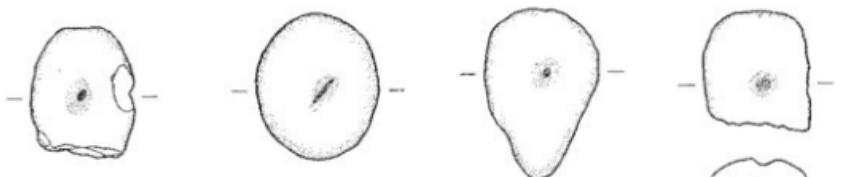
第35図 遺構外出土石器



第36図 遺構外出土石器



第37図 造構外出土石器

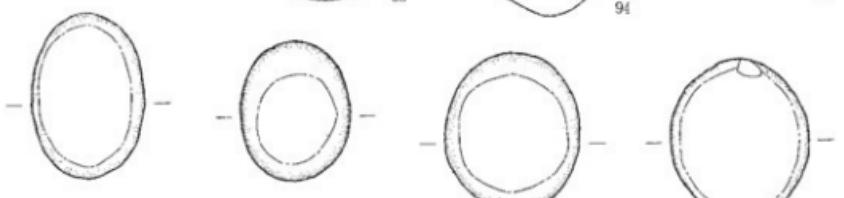


92

93

94

95

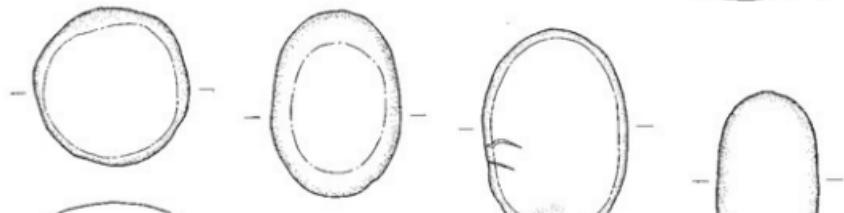


96

97

98

99

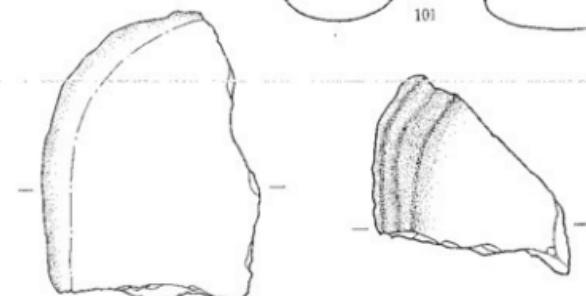


100

101

102

103



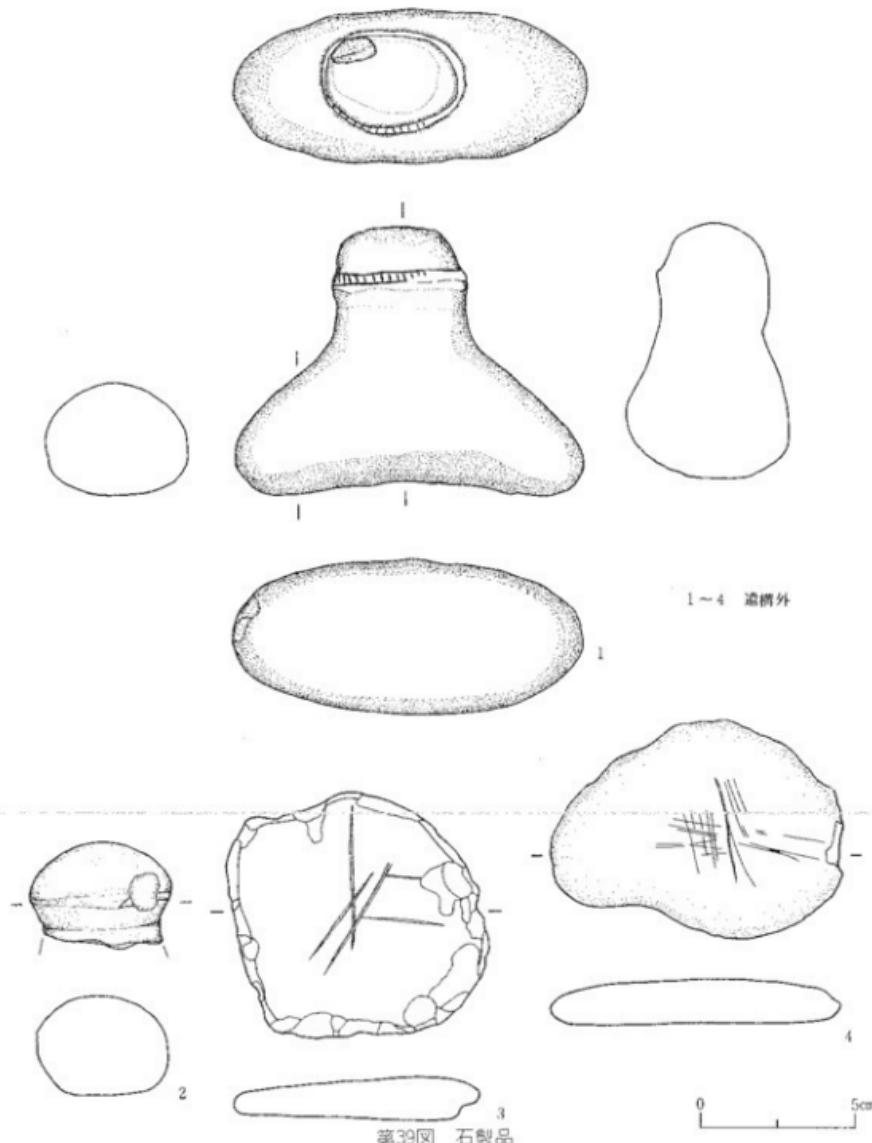
104 第38図 遺構外出土石器

105 0 10cm

石皿（第38図104・105）：破損している。

石製品（第39図1～4）

1・2は石冠である。1は頭部に刻みを施した凸帯は巡る。体部には黒色の焼痕がみられる。2は丸味のある頭部である。3・4は刻線蹠で、3は側縁を打ち欠いている。



## まとめ

### 遺構について

検出された遺構は堅穴住居跡、上塙、土垣墓及び柱穴状ビット群であり、その他焼土跡も確認された。これらのうち遺跡の南側区域で検出されたものは堅穴住居跡2軒で、縄文時代前期と弥生時代に属し、他に上塙6基である。上塙は2基が縄文前期、1基が中期に属する。南側調査区には畠地の天地替しや作付けなどにより限定された範囲内での調査であったため、遺跡の全容を明らかにできなかったが、北側調査区についてはほぼ全面に調査した。以下、北側の区域について記述する。検出遺構は住居跡が7軒、うち4軒は南円形もしくは隅丸方形のプランを呈する堅穴住居跡で、他の3軒は調査段階で住居壁を確認できなかったもので炉と柱穴のあり方から住居跡の認定したものである。上塙は43基検出され、遺物を伴出するもの16基については、1基が縄文時代前期のもので、他は縄文時代晚期に属する。他の上塙については、形状の類似性、比較的限定された区域内に集中すること、周辺の出土遺物等から縄文時代晚期のものと考えられる。柱穴状ビット群は調査区の南側に検出され、西寄りと東寄りの2群に大別される。ビット総数は113個で深さ15~30cm、45~70cmに分かれる。深いものは焼土跡の周辺に集中する傾向がみられ、焼土跡は散布や堆積のものと地山を掘り込んで作られた地床炉のものがある。このビット群の範囲内から出土した遺物等から、これらは縄文時代晚期の時期と考えられる。土垣墓は28基検出され、いずれも調査区南西側の台地縁辺部に集中する。土垣墓についてはその特徴を各項目ごとに記述する。

### 形状について

平面形状から次の5類に分類する。

1類 形状が隅丸長方形を呈するもので、長辺は直線を呈するものと他、膨らみ気味に緩く湾曲するものもある。長辺と短辺は互角をねぎながら直交する。(66号、61号、56号土垣他)

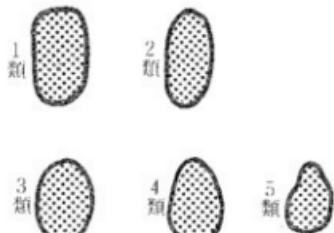
2類 形状が梢円形を呈するもので、長軸方向の弧はやや尖っている。長軸に対し短軸の長さの比は2:1以下。(24号、47号土垣他)

3類 形状が梢円形を呈するもので、卵形に類する。長軸に対し短軸の長さの比は2:1以上。

4類 形体が梢円形を呈するもので、長軸方向の一端はやや尖った弧を、他は緩い弧を描くもので洋梨形に類する。(51号、70号、74号土垣他)

5類 形体が不整梢円形を呈するもので、各辺が部分的に曲折したり、全体がゆがみを呈しているものがある。(54号、57号、63号土垣他)

上記分類中最も多い形態は1類及び2類であり、5類は少ない。ただし各類における差異数の隔



第40図 土垣墓平面形状模式図

りは小さい。しかし土塙群においてグループを設定してみると、4号住居跡内及びその周辺のものについては1類が最も多く(55%)、2類は極めて少ない(1例)。反面3号住居跡及びその周辺では1類が少なく(1例)、2類が最も多い(35%)。

底面形状から次の3通りに分類する。

1類 ほぼ平坦であるが、一部では凹凸を呈する。(19号、20号、21号土塙)

2類 長軸方向の一端が緩く立ち上がり一段高まる。(47号、48号、67号土塙)

3類 長軸方向の一端に小さな柱穴状ヒットを有する。(57号土塙)

これら2類、3類に関する土塙はいずれも長軸方向が東—西を基本とし、その痕跡は長軸方向東側に蟠して確認される。

#### 規模について

長軸の長さは最短が64cm、最長が174cmである。このうち80cm~150cmの範囲内に全体の約90%の土塙が該当している。この中でも80~100cm、120~150cmの各2範囲内には集中の度合いがより強く、全体に占める割合は前者で25%、後者では40%。短軸の長さは48~90cmで、この範囲での集中の度合いは長軸程顕著でない。しかし長軸に対する短軸の比は1:0.5~1:0.8の範囲内で多くがおさまっており、円形の土塙を有しない本遺跡では、梢円形の場合この数値範囲を基本にするものと考えられる。

#### 上部構造について

土塙の上面で、石や土器が配置されているものが3基確認された。石は拳大及び人頭大の河原石で(20号、48号土塙)、20号土塙では下端部を埋め込み立石としている。土器は粗製の深鉢で(70号土塙)、土器内に磨製石斧を入れている。これはいずれも土塙長軸の一端部(北東もしくは南東側)に配されており、48号、70号土塙基では副葬品として出土した玉類、耳飾りの出土範囲(地点)部分と位置がほぼ一致する。

#### 土塙墓内覆土について

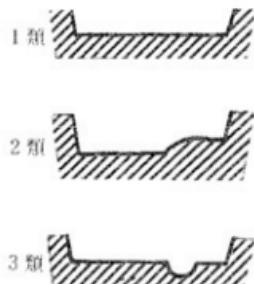
上性から3通りに分類する。

1類 暗褐色土を主体とするもので、ローム粒子が混入する。(19号土塙)

2類 暗褐色土と共にローム土が多量に混入する。(20号、54号、63号、68号、74号土塙)

3類 ローム土を主体とする。(52号、53号土塙)

1類及び2類の場合、覆土最下層、底面上に比較的厚くローム土を主体とする層が確認されるものもある。(47号、62号、66号、70号土塙)もある。



第41図 土塙底面(断面)形状模式図

#### 副葬品について

8基の土塙墓（21号、26号、44号、46号、48号、49号、54号、70号上塙墓）から出土している。副葬品は土製の耳飾り、玉類、石製品の玉類で、その他石鏡も出土している。土塙墓において出土地点が明確に確認された8基のうち、東一西方向に基本として長軸を有するものは7基で、そのいずれも土塙墓内の東～東南側寄りに集中しており、南一北方向長軸のものは北東及び南寄りにそれぞれ検出された。副葬品のうち耳飾りは、土塙墓内における出土数が、いずれも1～2点で、それ以上の場合は無い。玉類は土製に比べ多い。

#### 長軸方位について

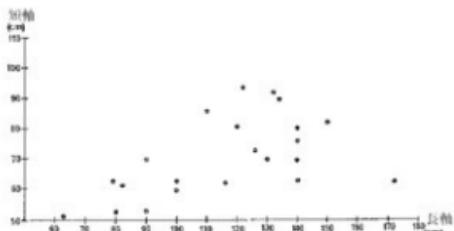
南一北及び東一西方向を基本とするものに大別される。前者はN40°E～N10°Wの範囲内に該当し数的には少ない。後者はE30°N～E50°Sの範囲内のもので、全体の約89%が相当する。

#### 時期について

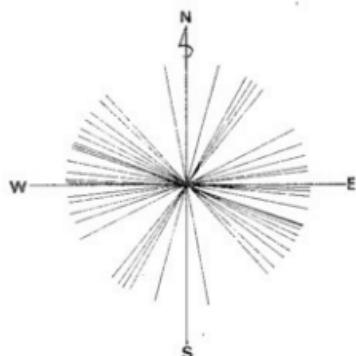
縄文晩期後半に属する住居跡との重複関係及び土塙墓覆土中出土の土器片と土塙墓群附近より出土の土器から、縄文晩期に属すると考えられる。

#### 土塙基の配置状態について

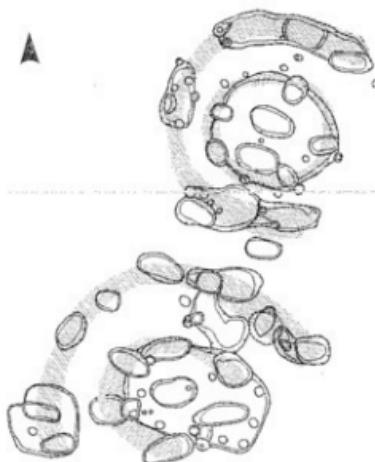
土塙墓は調査区南西部の台地縁辺部に集中しており、この一画が墓域と考えられる。墓域内には2軒の住居跡がありその内4号住居跡では周間に3本の溝が巡っており、住居跡、溝、それぞれに土塙墓が重複している。住居跡の場合はいずれも土塙墓が新しく、住居廃棄後に上塙墓が作られたと考えられる。しかしながら土塙墓のあり方は極めて規則的な配置状態を呈している。4号住居跡の場合につ



第42図 土塙墓長軸、短軸相関図



第43図 土塙墓長軸方位



第44図 土塙墓配置想定図

いてみると、住居跡内中央部に他と比較して多量の副葬品を出土する比較的大形の上塙2基を並列し、それを囲む様に住居壁に沿って5基の上塙墓が巡る形で配されている。加えて1号溝跡では上塙墓以外の部分からも土製の耳飾りが出土しており、溝自体が土塙墓としての機能を有しているとも考えられる。この様なことから上塙墓は内帶2重にわたって環状に配置され、その配置過程での住居跡は廃棄後もプランの利用が行われたものと考えられる。又、外帯は東側を開いたU字状の配置であり、この様な視点からみると、3号住居跡及びその周間に検出された上塙墓群についても、類似した配置状態が何がわかる、本遺跡においては墓域内に上塙墓群の一定の配列（環状）が各単位として構成されていたと考えられる。

#### 遺物について

本遺跡から出土した遺物は、土器、石製品（耳飾り、玉類、土版）、石器（石鏃、石錐、石匙、ヘラ状石器、搔器、削器、磨製石斧、石剣、石棒、石錘、くぼみ石、磨石、敲石、石皿）、石製品（玉類、石冠、刻線蝶）である。本項では土器について記述する。

土器は縄文時代前期、中期、晩期及び弥生時代のものである。1群、2群は縄文時代前期末葉から中期初頭にかけての土器である。いずれも破片で明確にとらえにくいが、1群は円筒下層d<sub>2</sub>式、2群が円筒上層a<sub>2</sub>類に比定され、29は類例が少なく問題がある。3群～5群は縄文時代晩期の土器で、出土量が多く、特に5群が最も多い。大部分が調査区北半からの出土である。文様は磨消縄文手法を用いるもの、平行沈線や工字文を施すもので、ほとんど鉢形土器である。3群が大洞C<sub>2</sub>式、4群、5群が大洞A式に比定される。6群、7群は2～8条の平行沈線を主体にするものや、口縁部に無文帶をもつものである。鉢形土器が多いが、比較的大きい器形のものもみられ、壺形土器も数点ある。縄文時代晩期及び弥生時代に属するものである。8群は弥生時代の土器である。鋸歯状文、菱形文を施すもの、刷毛目調整を行うもので、鉢形土器、壺形土器である。中期のもので、志摩式に比定されると考えられる。

#### 狸崎A遺跡出土（鈴木正夫氏所蔵）遺物について（第48～50図）

狸崎A遺跡の南側調査区は畑地で、3人の所有者が耕作していたが、台地先端部に遺物の散布が見られ、こここの所有者は地元の四ヶ小屋小阿知字坂ノ上55、鈴木正夫氏であった。調査時にレスの作付けを準備していたが、事前に調査させていただく承诺を得て、実施したもので前記のような調査結果（縄文時代前期、弥生時代の堅穴住居跡、土塙等検出）であった。

以下の遺物については、調査期間中に鈴木氏が昭和54年、台地の中央部を天地替した際出土した遺物が家に保管してあるとの話を聞き、御好意により本報告書に掲載させていただいたものである。

これらの遺物は、弥生時代のものであり、検出された弥生時代住居跡出土遺物と同様である。

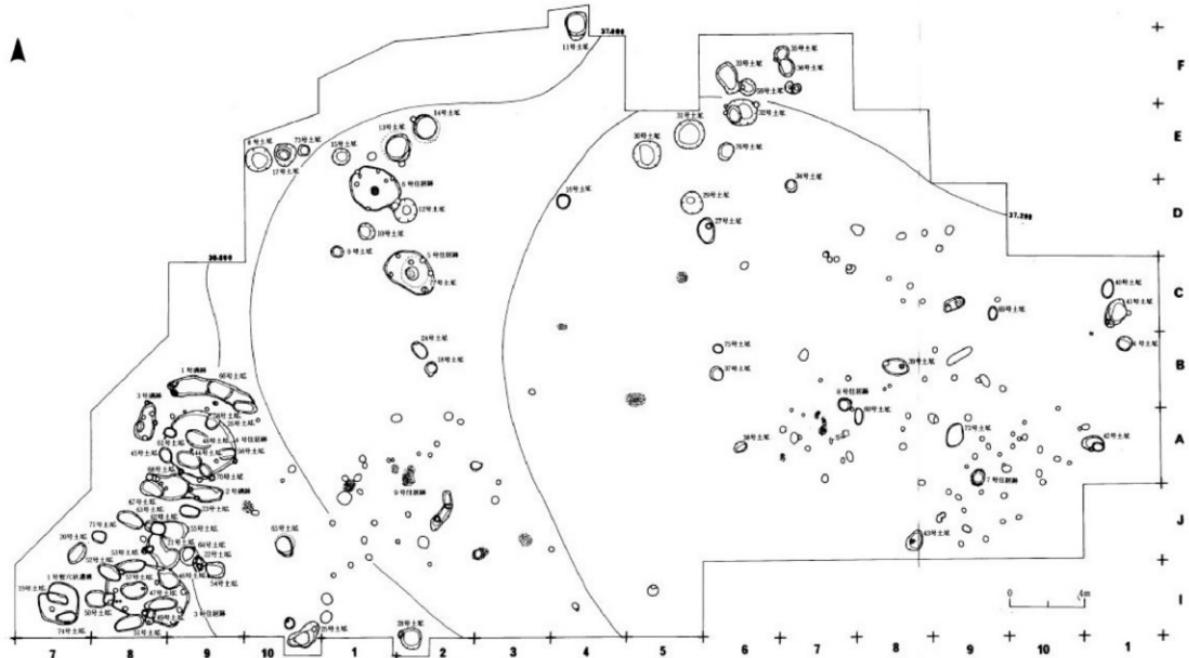
#### 土器（第48・49図1～9）

1は口縁部が外反する壺形土器で、口径17.7cm、器高31cmである。器面を刷毛目調整した後に、

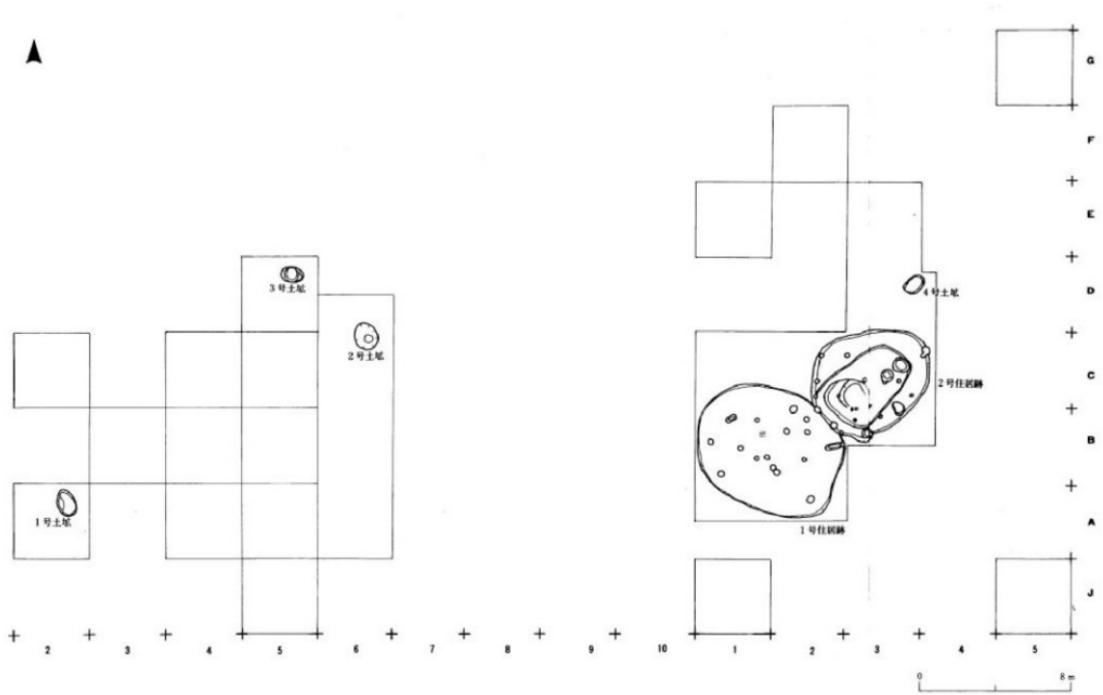
網文を施し沈線を巡らす。口縁部は上方に2条の平行沈線が巡り、その上には刷毛目文及び網文が、口唇部にも網文が施される。平行沈線の下は無文帯となっている。頸部には7条の平行沈線が巡り、この下には鋸歯状文が施される。外面は煤状炭化物が多く付着し、内面には部分的に刷毛目調整が施される。2は台付鉢の台部である。平行沈線が巡り、所々に粘土瘤が付く。3は鉢形土器である。口唇部に小突起をもち、沈線が施される。口縁部は工字文が施され、内面には1条の沈線が巡る。4～6は鉢形土器で、刷毛目調整後に網文及び沈線を施文するものである。7は鉢形土器で、口縁部に平行沈線を施すもので、沈線間は無文帯となっている。口唇部に沈線が巡る。8は甕形土器で、頸部平行沈線の下に鋸歯状文を施すものである。刷毛目調整及び網文を施文してから行う。9は鉢形土器の胴下部及び底部である。地文は撚糸文で、底部には刷毛目をもつ。

#### 石器（第50図10）

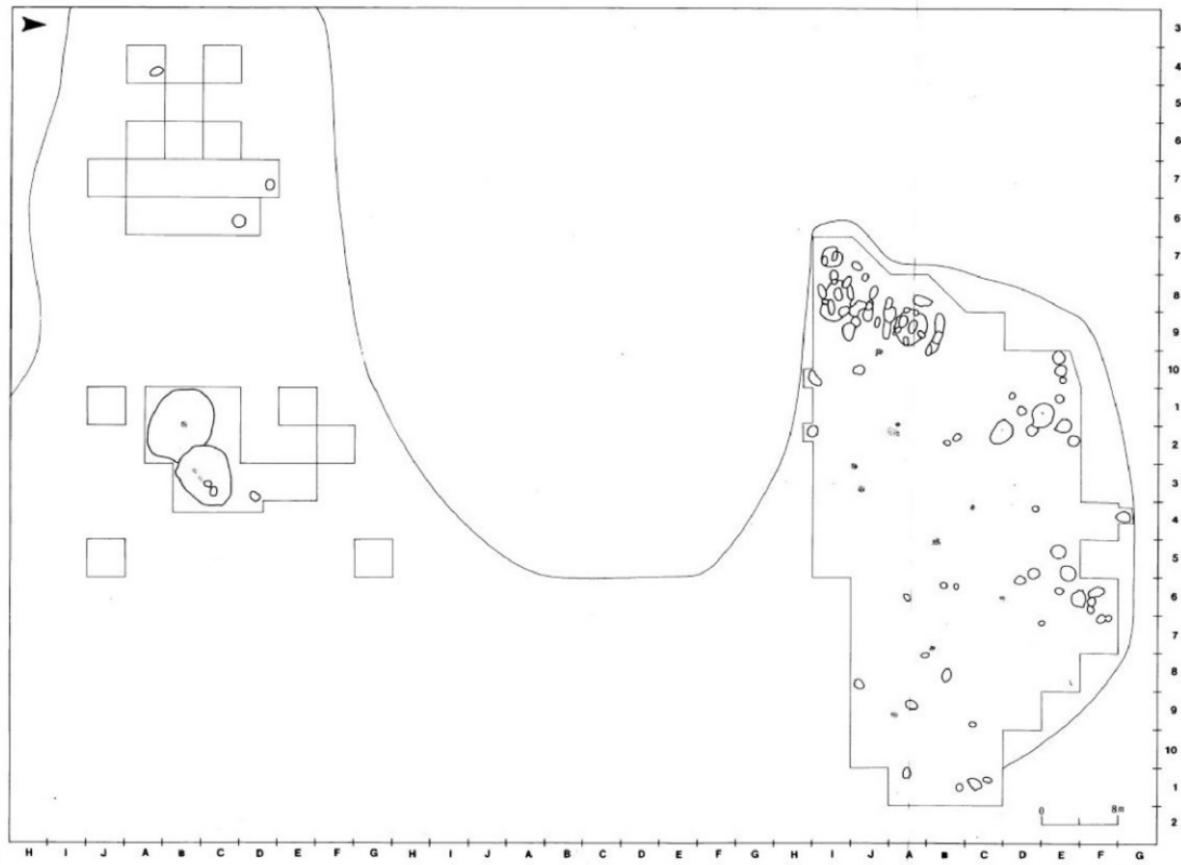
石冠である。断面が楔形をなすもので、基底部がくぼんでいる。部分的に擦痕が認められる。



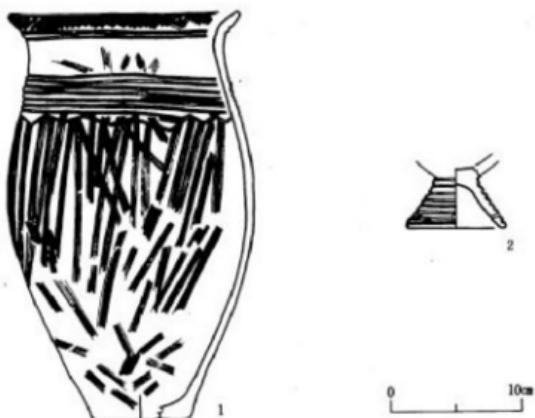
第45回 調査区北側



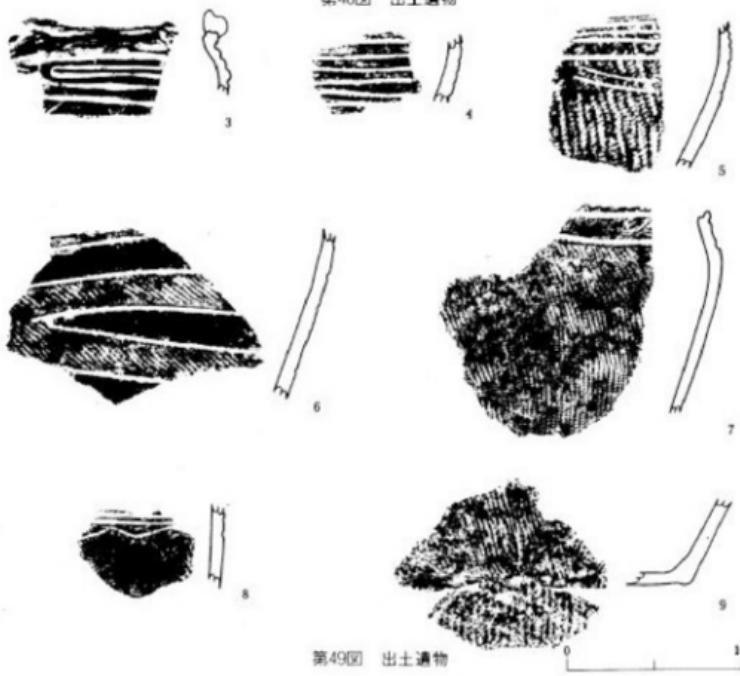
第46図 調査区南側



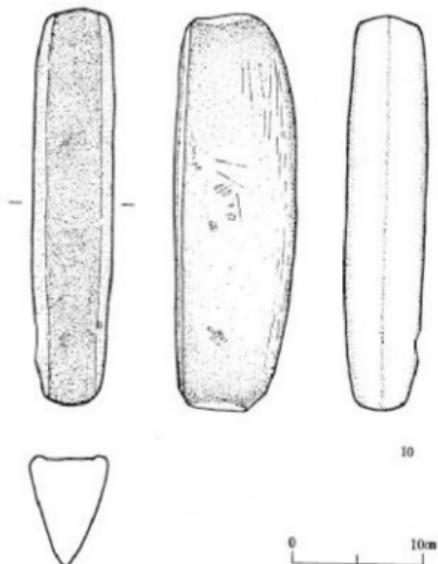
第47回 遺構配置図



第48図 出土遺物



第49図 出土遺物



第50図 出土遺物



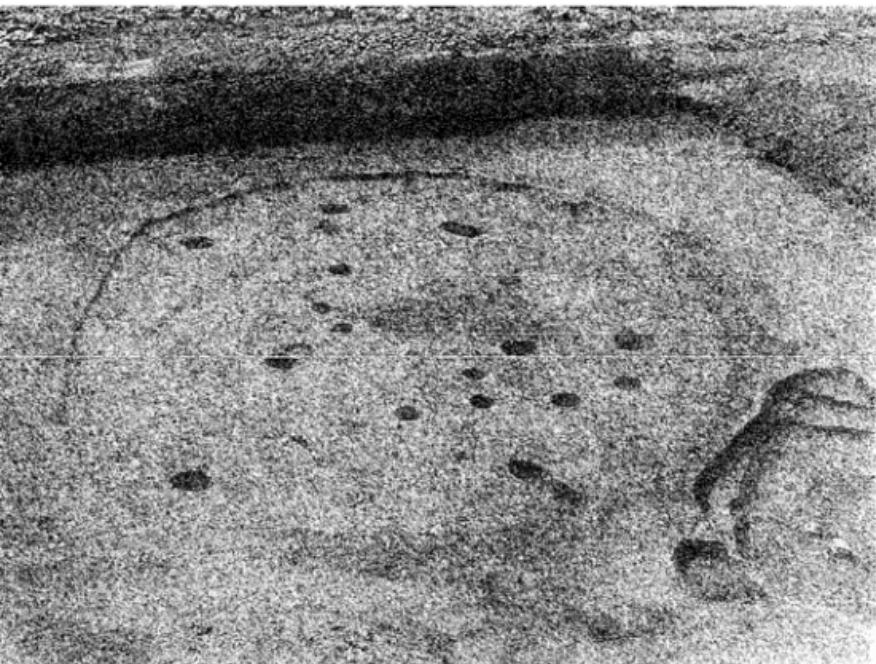
調査区全景 (東→)



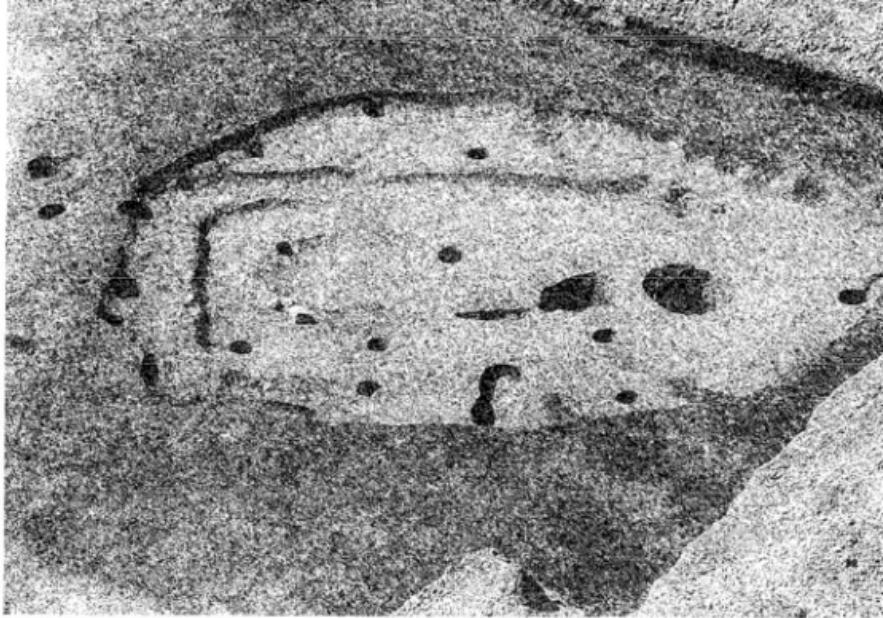
調査区西側 (東→)



1・2号住居跡（南→）



1号住居跡（東→）



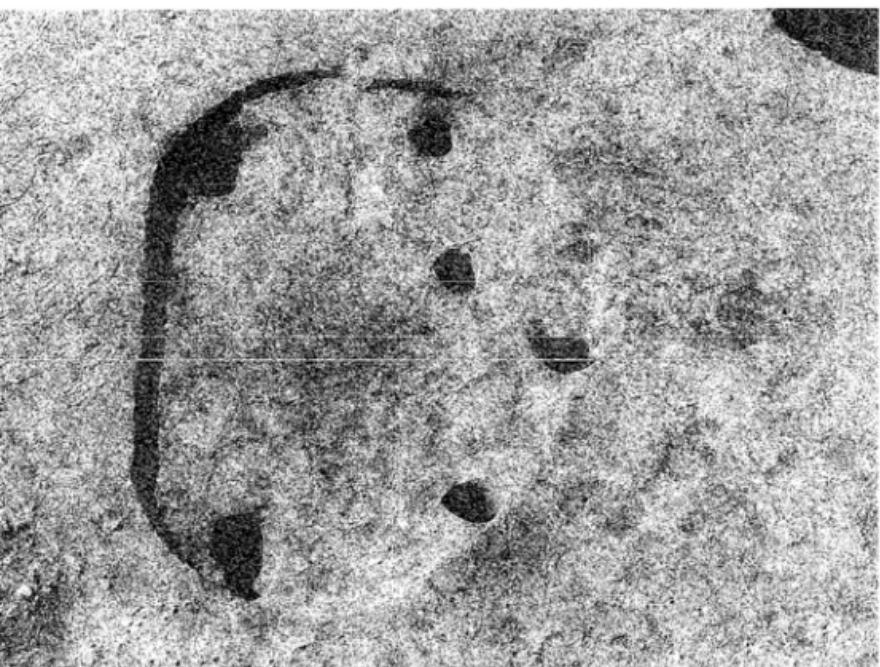
2号住居跡（東→）



3号住居跡、土塙墓群（東→）



4号住居跡、土塚墓群（東→）



5号住居跡（東→）